

Triplets—トリツプレツツ—

mairin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

→表紙絵

↳原作の世界観を拝借した、まったく新しい物語

※この物語は「新 妖界ナビ・ルナ」と「魔法医トリシアの冒険カルテ」を融合した二次創作で、2作品の『その後』が舞台です。

住宅街の一角に住む小林麻里菜は、ファンタジー小説が好きな小学6年生。ある日の夜、封印されていたはずの額の第三の目が開眼し、妖力に目覚める。木箱に入っていた巻物には、麻里菜の本名が『冰山マイナーレ』であることや麻里菜が『奇跡の子』だということが書かれていた。失っていた記憶を取り戻し、死別し転生していた弟と妹に再会したマイナーレは、『奇跡の子』についての情報を探るため、妖魔界へと渡る。

原作者のコンセプトを考慮し、最新話で未完更新停止としていただきます。

目次

① 葬られた真実

?	覚醒	1
?	過去	9
?	再会	18
?	妖魔界	29
?	魔法学校	40
?	医師試験	55
?	血涙	64
?	不穏	77

① 葬られた真実 ？ 覚醒

桜も散り始め、6年生になった麻里菜。読書が好きで、特に『妖界ナビ・ルナ、新 妖界ナビ・ルナ』と『トリシアは魔法のお医者さん!!、魔法医トリシアの冒険カルテ』が好きでした。何度も何度も読み返しては、二つの本の世界に浸りこんでいました。

新しいクラスになったばかりのある日、麻里菜はいつものように本を読んでいました。

『魔法医トリシアの冒険カルテ 竜の騎士と伝説の名医』

この本は2018年10月12日に発売され、18年の『トリシア』シリーズの幕を閉じた本でした。

読み返して5回目の、一番いいところを読んでいたそのとき、

「何その定規？ボロボロだぜ？新学期に新しいの買ってもらえなかったんだ、かわいそう。」

前の席の方から声が聞こえてきました。

麻里菜はふと顔を上げて、呆れた顔をします。

「荒井が浅間と一緒にいる……。嫌な予感。」

「確かにボロボロだけど、父さんからもらったんだ。高校の時に使ってた、思い入れがある定規だって。まだ使えるし、新しいのはいらないよ。」

荒井は学年で一番のいじめっ子で、何人もの先生が手を焼いてきました。

浅間は昨年引越してきた人で、勉強も運動も大の苦手。そのせいで、この学年のほとんどの人に馬鹿にされています。

「新しく買ってもらえば、バカじゃなくなるんじゃないやね？じゃ、いらねーな。始末してやるよ。」

荒井が定規の両端を持ちます。

「ちよつと、返せよー俺のだからー」

浅間が定規に手を伸ばした瞬間。

バキッ

「あつ、定規が……。」

麻里菜が目を見開いてつぶやきました。

荒井は2つに割れた定規を床に落として、踏みつけます。

「俺の…定規…。」

荒井は浅間の青ざめた顔を見てニヤリとすると、定規を壁に向かって蹴飛ばしました。

蹴飛ばされた定規の片割れが、麻里菜の足元に転がってきました。

「どうしてあんなことを……。」

麻里菜は定規を拾います。

「次は…これか。お前が使ってたらこの鉛筆がかわいそうだな。」

水色の塗装がある鉛筆も荒井の手に渡ります。

「このままじゃ、あの鉛筆も……。」

麻里菜は心に決めます。

「あんなの見過ぎすわけにはいかない。私が言っつてやんないと！」
バンッ

麻里菜は読みかけの本を、わざと音を立てて机に置くと、荒井に目をやりながら話しかけます。

「ねえ、さつきから話聞いているとき、あんだ、かなりひどいな。」

「はあ!? 邪魔だ、どっか行け。」

「どっか行けじゃないでしょ、人の物壊しといてさ! ほら。」

麻里菜は手の中の定規を見せます。

「この定規がいるかいらないか、何であんたが勝手に判断してんの!」
「だから?」

荒井は開き直ります。

『物を粗末にはしていけない』って知ってる? まあ、知らないよね。こんなことするんだから。」

麻里菜は定規を荒井の目の前に持ってきます。

「知ってるけど何か?」

「じゃあ、例えばの話。」

麻里菜の目の色が変わります。

「確か、あんた、お父さんからもらった野球のグローブ持ってるでしょ。噂だと、お父さんがあと一歩で甲子園に行けなかったから、あんたには行ってほしいって言って、グローブをもらったんでしょ？」

「そうだけど。」

荒井は、余裕そうな顔をしています。

「もし、家に友達呼んだ時とかに、そのグローブ壊されたらどう思う？」

「そりゃあ、ムカつくに決まってるだろーが！」

荒井が怒鳴ります。

「今、浅間はそう思ってるの！ねえ、そうでしょ。」

麻里菜が浅間の方を振り返ると、浅間は荒井の目を見てうなずきま

す。

「大切にしていた物を他人に壊された時の気持ち、分かった？」

荒井は「チツ」と舌打ちをして視線を下げました。

「何か言うことあるんじゃないの？」

荒井は渋りつつ言います。

「ごめん。」

「ちやんと、浅間の方を見て！」

「ごめん…なさい…。」

「定規はどうすんの？」

「俺が…弁償する。」

麻里菜はため息をつくとき、荒井に言付けをします。

「いい？他人にされて嫌なことは他人にもしない。常識よ！」

荒井は場が悪くなり、持っていた鉛筆を置いて、教室から姿を消しました。

ふと、麻里菜は我に返りました。教室にいる人全員がこちらを見ています。ドアには騒ぎを聞きつけた他のクラスの人たちが人垣を作っています。

「あ……、ど……どうも。」

急に恥ずかしくなってきました。

すると、ドアのところにいる人が拍手を始めたのです。それはだんだん広まり、やがてみんなが拍手をしました。

「すごい！」

「荒井を黙らせた！」

「すっげー！」

みんなが口々に言います。麻里菜は余計に恥ずかしくなりました。

「小林。」

自分と呼ぶ声に振り向くと、浅間が微笑んでいました。

「ありがとう、言ってくれて。俺じゃあ、言い返せないな。」

麻里菜も微笑むと、もう一つの片割れを拾います。

「これを持って、後で先生に言っ。折られた定規のことも、先生と相談して。」

麻里菜は定規を浅間に渡します。

「私の仕事は終わりー！その野次馬もさっさと退散！」

麻里菜はドアの方に、しっしと手を振ります。

麻里菜は自分の席に戻って、再び本を読み始めました。

「小林…すげえな…」

浅間がぼうっと立ったまま、麻里菜を見ていました。

その日の夜、麻里菜はなかなか眠りにつけませんでした。

突然襲ってきた、強い額の痛みになさされていたからです。

「痛い……。何でおでこが……？」

頭の中から何かが突いているような、奇妙な痛みです。

それに、熱を持っているような気がします。

「うう……痛い……。何で……何で……。」

しばらくすると治まりましたが、麻里菜の体力がかなり奪われ、どっと疲れてしまいました。

「いったい、何だったの……？」

次の日の夜、麻里菜はソファーに寝転がりながら本を読んでいました。昨日読んでいた本の続きです。

夕食を食べ終わり、風呂にも入り、歯磨きも終えていた麻里菜の自

由時間です。

「やばい、超面白いんだけど！」

ふと、麻里菜は時計を見ました。

「やっべ、10時だ！」

そこに、ちょうど風呂から上がったお母さんが来ました。

「麻里菜、まだ起きてたの？10時になってるわよ。」

「分かってる。今そう思ったところ！」

「って、また読んできたの？この本。」

お母さんは麻里菜が読んでいた本を取り、ブックカバーを外します。

「ちよつ、何すんの!？」

「ふーん。自分の小遣いで買った本がこれか。魔法なんて存在するわけがないのに。こんなのを読むなら、もつと為になる本を読みなさいよ。」

お母さんはパラパラとページをめくり、また「ふーん」と言いました。今度は何を言い出すのかと、麻里菜は身構えます。

「絵ばつかり。字も大きいし。6年生が読む本じゃないでしょう。」

「いや。対象年齢は小学中級〜上級からってなってるけど。」

麻里菜は本屋でそのコーナーから、今、お母さんが持っている本を見つけたのです。

「だから、もっと難しい本も読めるよね、って言いたいの。」

「もう、誰がどんな本を好きだろうと、別に関係ないでしょ！」

麻里菜はお母さんから本を取り返します。

「しようがないじゃん。図書室に置いてあるこの本のシリーズ、全部読んじやっただから。自分で買うしかないの！」

麻里菜はブックカバーをつけ直してから、ランドセルの中に入れました。

「はいはい。」

お母さんは呆れた様子です。

「いい？自分の小遣いで買ってるんだからいいでしょ！」

「じゃあ、小遣いを麻里菜にあげてるのは？それを稼いでるのは誰よ

「？」

「う……。……もういい。とにかく、いちいち言ってくるのはやめて！おやすみ！」

バタン！

麻里菜はリビングのドアを思い切り閉めます。

麻里菜にはおそらく、お母さんの

「ドアが壊れるー！」と怒鳴った声は聞こえていないでしょう。

麻里菜は階段の電気をつけると、なぜか不安になってきました。また眠れないかもしれないと思ったからです。

「はあ……。」

麻里菜は憂鬱な気持ちで階段を上がりました。

2階に着いたそのとき、麻里菜は座り込みました。

「ううっ！」

昨日の夜のあの痛みが、また襲ってきたのです。尋常ではない痛みは昨日よりもずっと増していました。

麻里菜は右手で額を押さえます。

ヌメリ

「！」

麻里菜は思わず手を引っ込めました。まるで蛙や蛞蝓を触ったかのような感触です。

もう一度触ってみると、ヌメリとした部分が盛り上がっていることを確認できました。

(何なの……？)

麻里菜は立ち上がりましたが、少し吐き気を覚えて、また座り込んでしまいました。

(何か景色がおかしい……？ゆっくり動いてる……？)

麻里菜は壁に手をつけながら、何とか立ち上がりました。やはり、スローモーションの景色は変わりません。

(でも、あの気持ち悪い物体の正体を知りたい。)

2階の納戸の隣には洗面台が取りつけてあり、三面鏡になっています。麻里菜は周りの景色を見ると気持ち悪くなってしまうので、片手

で両目を押さえ、もう片方の手を壁につけながらそこへ向かいま
した。

景色が見えなくても自分の家なので、麻里菜は感覚で洗面台まで行
くことができました。照明のスイッチも感覚でつけました。

麻里菜は両目を押さえていた手を放しました。自分の顔を見た瞬
間、麻里菜は膝の力が抜け、くずおれてしまいました。

額に『目』があったのです。

鏡越しにその目が麻里菜を睨みつけているようでした。

「おでこに……目が……！」

麻里菜は立ち上がり、もう一度鏡を見ます。

今度は口が閉じられなくなりました。

麻里菜の黒目の部分が空色になっていたのです。その上、瞳がぐる
ぐると渦を巻いているではありませんか。

それだけではありません。金髪になっていたのです。

麻里菜は自分の身に何が起こったのか分からず、泣いてしまいまし
た。

「私は……『化け物』になってしまったの……？」

麻里菜は壁に背をつけて座ります。

「どうしたらいいの……？」

頬を伝った涙が手の甲に落ちました。

すると、両手が急に冷たくなりました。涙を拭こうとする手が頬に
触れると、微かに冷気を感じました。

「ついには冷気まで……。」

麻里菜は両手で顔を覆いました。指の間からは垂れ下がる髪の毛
が見えます。その髪の毛が根元から元の色に戻ったのです。

麻里菜が手を放すと、また金髪になるのです。

「顔を隠すと元に戻るの……？」

麻里菜は鏡を見ました。思い当たる節があったのでしよう。右手
で下から顔を隠していききました。

ちようど、額のところで元の姿に戻りました。

「やっぱり、この『目』が原因だったのね。」

麻里菜は確信します。

「でも……ずっと手で隠すわけにはいかないし……。」

麻里菜は両手を見ました。

「この冷氣……うまいこと使えるかな……。」

麻里菜が両手を握りしめると、冷氣はいつそう強くなり、氷の粒が舞うようになりました。手を開くと、氷の粒はくるくると渦を巻き始め、合体していきます。

「わあ……。」

麻里菜は思わず見惚れていました。

やがて氷の粒は、小さな長方形のシートになっていました。麻里菜はそのシートをつまみます。

「すごい！氷なのに冷たくない。布みたいにしなやかで、薄っぺらいし。の割には丈夫だし。」

表裏や洗面台の照明で透かして見ても、見た目は普通の氷です。

「不思議……。」

そして、麻里菜は鏡で位置を確認しながら、氷のシートを額の目に貼りつけました。すると、麻里菜の瞳と髪が元の色に戻りました。

「よかった……戻った……！」

麻里菜は鏡に向かって笑顔を作ります。

しかし、このときの麻里菜は知る由もありませんでした。

自分の驚くべき正体を知ることになるとは。

? 過去

「何か疲れたし、もう寝よう。」

時刻は10時半で、麻里菜が寝なくてはいけない時刻を30分過ぎています。とりあえず、階段と洗面台の電気を消しました。

「ふああ、眠い……。」

麻里菜が目を擦ったその時。

ガタツ

「!」

麻里菜の右足に何か物がぶつかり、蹴飛ばしてしまいました。

床に転がっていった音を聞くと、どうやら木でできた物のようです。それは廊下を転がり、麻里菜の部屋のドアにぶつかりました。

「何だろう……。」

麻里菜はかがんで、木でできた物を拾ってみました。

暗闇では見えないので、ドアを開け、電気をつけました。自分のベッドに座ると、木でできたものを膝の上に置きました。

「…木箱?」

オルゴールの小箱くらいの大きさで、ふたがついている箱です。ふたには、細かい雪の結晶の彫刻がされていました。

ふたを開けようとしたのですが、開きません。思い切り力をいれても、びくともしません。

麻里菜の親指に、くつきりと赤く跡がついたその時、箱がぼんやりと光り、とある声がしました。

『アナタハ、誰?』

「えっ、私?……って、箱がしゃべった!」

麻里菜は思わず、箱を床に放り投げてしまいました。箱からの声は、耳に聞こえるものではなく、頭に響いてくる声でした。

『イテテテテ。』

「わっ、ごめんなさい。えっと…私の名前は小林麻里菜。」

麻里菜は箱を拾ってから名乗ります。

『小林…麻里菜。トスルト、アナタハ、奇跡ノ子?』

『奇跡の子』って?」

『額二第三ノ目ヲ持ツ、三ツ子ノコト。』

麻里菜はその言葉にはっとしました。

「額に第三の目を持つ…:そういうえば。さっきの私、おでこに目があったよね?そのこと?」

『ダツタラ、コノ箱ノ封印ヲ解ケルカモシレナイ。』

「封印を解く?どうやって?」

『箱ノクボミニ、アナタノ第三ノ目ヲ押シツケテ。』

箱のふたと本体の境目に、指で押しつぶしたようなくぼみがあります。麻里菜が箱を開けようとしたときに、親指をかけたところです。

「えっ、目を?…:ここに?」

麻里菜は戸惑います。

「第三の目を直接?」

『ソウ。封印ヲ解イテ、直接押シツケル。』

麻里菜は氷のシートを外し、第三の目を開眼させました。再び空色の渦目に金髪の姿になった麻里菜は、左手で前髪を上げ、右手に箱を持って、言われたとおり、くぼみに目を押しつけました。

一瞬、第三の目辺りで冷気を感じました。

カチャ

「開…:いた?」

麻里菜はふたに手をかけます。すると、ふたが勝手に開いて、中から部屋中を射るような光が飛び出しました。

「うわっ!」

『ヤット会エタ。』

光を放っていたのは、箱の中の小さな巻物でした。光がおさまると、麻里菜は巻物を取り出します。

『本当ニ奇跡ノ子ガイタナンテ。ソレナラ、コノ巻物ヲ読ンデ。』
「うん…:。」

麻里菜は藍色の巻物のひもを解いて広げました。

「何これ。何て書いてあるか分からない。」

文字を見る限り、時代劇に出て来そうな崩した文字で、どう見ても

楷書ではありません。

『ソウダツタ。現代ノ言葉ニ直サナイト。』

巻物が再び光りました。書いてある文字がそのまま光って、形を変えていきます。

光が消えると、巻物には見慣れた「文字」がありました。

「これで読める！」

巻物にはこのようなことが記されていました。

これが書かれた後、奇跡は起こる。

もののけの世と魔法使いの世はひとつになる。

もののけの世の王と魔法使いの世の王は婚約し、その間に生まれた子供は三つ子。即ち奇跡の子である。

長子の名はマイナーレ。

人間の世に移り住み、妖の力によって

再びもののけと魔法使いの世に戻り、天地を舞う。

巻物はここで破られていました。

麻里菜は巻物にあった名前を反芻しました。

「マイナーレ？マイ…ナーレ。」

ふと、記憶の回路がつながりました。

「そうよ、私の名前は…マイナーレ！」

『アナタハ、氷山マイナーレ ダツタノネ。』

「氷山？」

『アナタノ父上様ノ苗字。』

「私は……、氷山マイナーレ。氷山マイナーレ！」

マイナーレの額の目が熱くなりました。自分の真の名前を唱えて、妖力が完全に解放したのです。

今度、マイナーレは箱のふたを裏返してみました。ふたにも墨で書かれた文章がつづつてありますが、こちらも文字が読めません。

『デハ、コチラモ。』

巻物は自ら発した光の一部を、ふたの裏側に飛ばしました。文字が光って読める字に変わると、このように書いてありました。

もののけと魔法使いとの間に生まれた長子は

失われた妖の力を解放し

もののけと魔法使いの世を繋げ

世の安定に努める

「何かを予言しているみたい。私のことなのかな。」

『アナタノコト。遙力昔カラ、言イ伝エラレテイル。』

「そうなの？私を、いや、『奇跡の子』の誕生を予言した人がいたのね。」

『奇跡』かあ。」

マイナーレはため息交じりにつぶやきます。

「でも、どうしたら…？もののけと魔法使いの世を繋げるっていつても……。」

すると、巻物はこんなことを言い出しました。

『ナラバ、記憶ヲ戻スシカナイネ。』

「記憶を戻す？」

巻物はマイナーレの問いかけには答えずに言います。

『覚悟ハ イイネ？』

「ちよつ…、覚悟つて……。」

『アナタノ記憶ガ戻レバ、言葉ノ意味ガ分カル。デモ、アナタガ耐エラレルカ。』

「耐える？そんなひどい話？……でも、教えて。知らなきゃいけない気がする。」

巻物は光をまとうと、マイナーレの頭に飛び込みました。

「ううっ！」

「レンユイ、かわいい三つ子だよ。」

私の傍らで、誰かが言った。おそらく、私の父だ。

でも、返事はなかった。私は誰かの上に乗せられているのだが、『誰か』は冷たい。

「君の命と引き換えに生まれた三つ子。何てかわいいんだ。」

何か、別れを惜しむようにも聞こえる。

「僕に託された使命、それは、この子たちの第三の目を封じること。もうすぐ、君に会いに行くから。」

そう言うと、眩しい光を感じた。その後、父の声を聞くことはなかった。

「また第三の目を持つ子が生まれただど!? 今度は3人も! 今すぐ人間界に送ってしまえ!」

「国王、それはやりすぎでは……?」

怒り狂う国王を執事がなだめている。

「言い伝えを知らないのか!? 『額に第三の目を持つ子が生まれたならば、世界は滅びる』と言われていたのだ! 私では責任を負えん!」

国王は手を前に出すと、人間界への道を作った。

私は、そんな国王の言葉を聞き逃さなかった。

「本意ではないが、すまない。」

私たち3人は施設で暮らしている。3人だけの言葉である程度の会話ができる。

「レン、パット、お腹痛いの?」

レンとパットがお腹をおさえたので、私は尋ねた。その時、私は施設の人に抱えられてしまった。

「こつちに来ちゃだめよ。お腹が痛いもうつるから。」

レンとパットは隔離されていた。2人が熱を出してからのことだった。

私の部屋はしつかり掃除されている。隔離されている2人の部屋は薄暗くて汚い。

2人はろくに食べ物を口にしていないようで、げっそりと痩せ細っていた。

私は決めた。

「あれ? まりなちゃん、食べないの?」

私は2人の食べ物を確保するため、昼と夜ごはんの離乳食を一切食べなかった。

「あとで」

こう言うと、施設の人は離乳食の器にラップをかけておいてくれる。

そして、施設の人の昼食休憩や夕食休憩の時に、こっそり部屋から

抜け出し、2人に、残した離乳食を食べさせる。

時には「おかゆ」と言うと、施設の人が持つてきてくれたりする。もちろん、レンとパットにあげるためのものだ。

しかし、その甲斐なく、レンとパットは日に日に顔色が悪くなる一方だった。

「姉ちゃん。どうして食べさせてくれるの?」

レンが私に聞いてきた。

「だって、何も食べてないんでしょ? 死んじゃうよ。」

今度はパットが訴えてきた。

「お姉ちゃん、うう、気持ち悪いよ。出ちやいそう。」

「大丈夫?」

私はパットを部屋の隅に座らせ、背中をさすった。すぐに吐いてしまった。

薄暗い中でもわかる。パットの苦しそうな顔が。泣く力さえない。

ふと、レンを見るとレンが口をおさえている。どうやら、食べ物をも受け付けなくなってしまったようだ。

私はレンに駆け寄り、レンにも背中をさすってあげる。レンもパットと同じ結果だった。

その日の夜、夕食休憩の時にも2人を見に行った。

2人は起き上がれなかった。

レンがやつとのことで顔をこちらに向けた。

「姉ちゃん。いつもありがとう。」

パットもこちらを向き、手をのばしてきた。

「お姉ちゃん。」

私は2人の目から何かを悟った。2人の間に入ってしやがみ、2人の手をとった。

「もう会えないかも。」

パットの言葉に私の目には涙が浮かぶ。

「会えないって、……死んじゃうの?」

「かもね。」

レンがつぶやく。

「そんな。早くここを出て、おいしいものいっぱい食べようよ…。」
私の握っている手に力が入った。

「食べたかったね。でも、ムリかな。」

私の涙腺が壊れた。止めどなく溢れてくる。

「元気だね。」

パットが私の目をしつかり見た。

「ありがとう。」

レンも私の目をしつかり見た。

2人の目から光が消え、苦しそうに上下していた胸の動きが止まった。

「レン…パット…？」

私は握っていた2人の手を置いた。涙を拭うと、2人の手を再び握った。

その手はすでに冷たかった。

「うそ…レン、パット、目を開けて…。」

私は声をあげて泣いた。私が握っていても2人の手は冷たく、硬くなっていく。

泣き声に気づいた施設の人が部屋に来て私を引き離すと、施設の人は2人を見て慌ただしく部屋を出ていった。

その人が別の人を連れてくると、別の人は「ふうん。」と言った。

「後で片付けておく。さっさと供養を済ませとけ。」

別の人は部屋を出た。

命令された人は2人の顔に白い布を被せると、手を合わせた。私も真似をする。

30秒くらい経つと、その人は手を合わせるのを止めた。そして、私を抱っこして、頭を撫でられた。

「まりなちゃん、分かっているんだ。そうだよね、そうだよね。」

「おきる？」

私は2人を指さす。

その人は首を横に振り、かすれ声で言った。

「れんとくんとみはるちゃんにバイバイ、しようね。」

それが最後に見た2人の姿だった。

(この人は、具合が悪くなった人をほったらかしにする。だから、レンとパットは死んだんだ！マイもいつ、そうなるかわからない。ここを出たい。)

私は悔しさの反面、自分も同じ立場になるかもしれないという恐怖心があった。

その頃、里親希望の夫婦が施設を訪れた。小林さんと言うらしい。私は夫婦の前に出された。

「この子がまりなちゃんなのね。」

この夫婦は2年前、待望の赤ちゃんを授かり出産したものの、生まれて1週間後、赤ちゃんの容体が急変し、亡くなったという。その赤ちゃんの名前は『麻里菜』だった。

「どうしてかしら。あの子と顔がよく似ているわ。まるであの子と双子のようね。」

「ほんとだ。麻里菜とそっくり。年も同じようだし。」

「そうね。この子の里親になりたい。」

私はこの夫婦と一緒に暮らすことになった。

「名前は、麻里菜でいい？あの子と同じで。」

「ああ。俺もそう思ってた。」

2人は顔を合わせてうなずいた。

「よろしくね、麻里菜ちゃん。」

新しいお母さんが私の頭を撫でると、新しいお父さんは私を抱き上げ、たかいたかいかいをしてくれた。

なぜだろう。私の名前は「マイナーレ」のはず。レンとパットにはあだ名の「マイ」とも呼ばれたこともあったが、どうして「まりな」になったのか。

お母さんが聞く。

「あの子の『まりな』という名前って、この子の親がつけた名前なのですか？」

施設の人は目線を上に上げた。

「えっと、確か、名前が分からなかったので、私たちがつけました。」

そう言うと、渋い顔をする。

「実は、麻里菜ちゃんにはもう2人、きょうだいがいたんです。その2人から呼ばれていたのが『まりな』と聞こえただけです。」

それ以上は語りたくないのか、「もう2人のその後」については言葉を慎んだ。

そして、ここを去る日。

私はお父さんに抱っこされて、久しぶりに施設の門を出た。

(もう、こんなお家とはお別れ。レンとパットの分まで生きてやる。) 新しい家に着くと、私は布団の上に寝かされた。こんなきれいな家は初めて見た。

最初からこんなところに住みたかった。

そういうことにしてしまいたい。私のありったけの妖力で。

「麻里菜ちゃん、ちよつと待っててね。」

お母さんが目を離れた際に、私は両手を握り、レンとパットとおしゃべりしたあの言葉でこう言った。

「思い出を、変えて。」

私は全てを忘れた。

私に関わった人の記憶も、書類も全て改造した。

お父さんとお母さんの記憶の中には、『娘が生まれてすぐに亡くなった』ことは消えてなくなつた。そうした方が都合がよかつた。

私は「小林家」の実際の長女となつたのだ。

年相応ではなかつた言動は、普通の人間と同じくらい能力になり、もはや魔法使いの父と妖怪の母との子であることすら感じないほどだった。

これで幸せになれるはず……。

? 再会

「はっ、これが……。私の消えていた記憶?…うつ…!」

マイナーレは顔を歪めました。ズキズキと頭痛がします。

『急ニ記憶ガ戻ツタカラ、脳ニ負担ガカカツテイルカモ知レナイ。』

巻物はそう告げると、マイナーレを心配するように淡く光ります。

「レンとパット。もう二度と会えないんだよね。でも、会いたいな。無理だと思っけど。」

2人の無残な姿が目には浮かびます。だから余計に会いたくなるのです。

マイナーレの頬に、一粒の涙が伝いました。

『泣イテル。ヤツパリ会イタインダネ。』

巻物が光ったり消えたりしています。

「見透かされた。バレたか。」

その時、

「姉ちゃん。」

ふいに男の子の声がありました。

「お姉ちゃん。」

次は女の子の声がありました。

「えっ?」

マイナーレは振り向きましたが、誰もいません。しかし、マイナーレには声の主が誰だかは分かっています。

声変わりしたその男の子の声は、初めて聞く声のはずでした。でも、懐かしいと思うのです。あの時の名残が残る声は、レン、すなわちマイナーレの弟のレナードのものでした。

女の子の声も成長により、少しばかり低くなっていました。でもなお、平均的な女の子の声よりは高いでしょう。あの時からほぼ変わっていません。その声は、パット、すなわちマイナーレの妹のパトリシアのものでした。

「もしかして……レンとパット?」

「そうだよ。」

2人は同時に言いました。

「い……生きてたの……?」

マイナーレは涙を浮かべて聞きました。

「ああ。正確に言えば、『生き返った』ということだな。『妖魔界』って
いう世界に住んでるんだ。」

「そう。お互い違う世界にいるの。お姉ちゃんに会いたい。」

マイナーレも思わず「私も!」と答えましたが、すぐにうつむきま
した。

「でも……どうやって……。」

すると、巻物がまばゆい光を放ちました。光が巻物から離れ、ゆっ
くりとマイナーレの目の前に来ました。マイナーレは両手でその光
を受けると、光は姿を変え始めました。

「わあ……。」

どうやら、レナードとパトリシアには、マイナーレの姿が見えるよ
うです。

「ペンダント?」

マイナーレは光から姿を変えたペンダントを持ちました。雪の結
晶のペンダントで、中央には青いサファイアが埋め込まれています。
ひもは革ひものようで、首にかけられるようになっています。

と、ペンダントのサファイアの部分が青く光り、ペンダントが話し
始めました。その声は巻物と同じ声でした。

『妖魔界ト人間界トノ道ヲ開ケバ、2人ニ会エル。』

「ええつ、レンとパットがいる世界と私がいる世界の間に道があるつ
てことかな?その道を開くつて、どうすれば……?」

マイナーレがつぶやくと、レナードの声がします。

「姉ちゃんならできる。そうだろ、パット?」

「うん。私もそう思う。私たちに流れている妖怪と魔法使いの血があ
ればきつと。」

「妖怪と魔法使いの血……。」

その言葉を聞いて、胸がざわざわしたマイナーレは髪の毛を指に掛
けます。ブロンドの髪が、ペンダントの光を受けて、薄く青色に光つ

ています。

「ということとは、さっきの力を使うの？」

あの時、手に舞いだした冷気。恐怖心がありつつも、それをうまく使って、第三の目の封印に成功したのです。

『やり方ハ、アナタノ本能ガ教エテクレル。』

マイナーレはペンダントを握ると、雪の結晶の部分を胸に当てました。

目を閉じると、額の第三の目が、かあつと熱くなりました。

「分かったよ、サファイア。」

『サファイア？』

「あなたの新しい名前！」

マイナーレはそう言うのと、サファイアを掲げます。

「我は奇跡の子なり。我の力を使い、道を開けたまえ。」

マイナーレは言って初めて、自ら発した言葉にはっとしました。

そうするのもつかの間、サファイアから吹雪が舞い上がり、頭上に黒々とした大きな穴が開きました。

「これが妖魔界と人間界を繋ぐ道か……。」

マイナーレは見上げて、困惑します。

穴の中はいかにも険しそうでした。

「道はできたけど、このままじゃあ……。命がいくつあってもそつちには行けなさそうだな。」

レナードの声がして、続いて「うーん」と考えているような声もしました。

マイナーレは再びペンダントを胸に当てて、目を閉じます。

マイナーレが目を開けた時には、サファイアはすでに穴の中に投げ込まれていました。

青い光の尾を引きながら飛んでいくサファイアは、それが通った所から、穴の中を明るくならかな道に変えました。

「レン、あの光はー」

パトリシアはレナードに聞きます。

そして、パトリシアがその光をつかみました。

「今、姉ちゃんが投げ込んだペンダントだ。」

レナードはパトリシアの手の中のものを見ます。

「つてことは…、行けるー！」

2人は言ったと同時に、穴に吸い込まれました。

マイナーレは呆然と立ち尽くしています。自分にこんな力があつたことに驚き、おののきました。

すると、マイナーレの後ろで声がしました。

「マイ姉ちゃん。」

「マイお姉ちゃん。」

マイナーレは後ろを振り返ると、そこにはあの2人が立っていました。

レナードとパトリシアです。2人ともマイナーレと似た姿をしています。

レナードは金髪のみディアムで、鶯色の渦目をもっています。

パトリシアは金髪のポニーテールで、薄紅色の渦目をしています。

そして2人とも、額に第三の目がありました。

「うそ……。」

マイナーレの視界が涙でぼやけます。

「レン……パット……。久しぶり。会いたかったよ……。」

マイナーレは感極まり、思わず、2人に抱きついてしまいました。

「お姉…ちゃん…。」

パトリシアも泣いていました。レナードは歯をくいしばって、泣くのをこらえています。

「生きててくれてよかった。」

マイナーレがそう言つてレナードの頭を撫でたとたん、レナードがこらえきれずに、とうとう涙を流しました。

「そんなこと言われたら、昔のことを思い出しちゃうじゃねえかよ。」

「そうだよ、もう。」

パトリシアも同じ意見のようです。

「ほら、お姉ちゃんのペンダント。」

3人は抱いていた腕を解くと、パトリシアはペンダントを渡しまし

た。

マイナーレは涙を拭くと、サファイアを首にかけ、ローテーブルの前に座りました。

「じゃあ、2人とも座って。」

マイナーレは促すと、2人はマイナーレの両隣に座りました。円いローテーブルなので、あまり「隣」は関係ないのですが。

「あのさ、生き返ったってどういうこと？」

マイナーレはさつきから、そのことを知りたいと思っていました。

「冥界の王からもう一度、命をくれたの。それもとんだ偶然。ね、レン？」

「何で急に名前と呼ぶんだよ。まっ、別に今までもそうだったからいいけどさ。」

レナードはわざとらしく咳払いをすると、仕切り直しました。

「本当はお姉ちゃんが住んでいる人間界に、人間として生き返りたかったんだけど、両親が人間じゃなかったからできなかつたんだ。それで両親が生前住んでいた、妖魔界に住むことになったんだけど、そこから大変だった。」

「うん。本当に辛かった。」

レナードとパトリシアは思い出すのも苦しいようで、マイナーレはおろおろします。

「……ええっと、レンは、ヴィントールの資産家・デル・ハイトの娘のダニアの子として生活していて、レンが生まれる前に、アムリオンの南街区に引っ越していてパットと仲がよかつたんだけど、両親が貴族に賄賂を渡さなかつただけで牢屋に入れられ、生きて出てきたのはレンだけだった、だっけ？その後、パットと支えあつて生活していたけど、戦争が始まると食べ物求めて行つたところで貴族に捕まり、そこをアンリと言う人に助けられて、その人に魔法を教えてもらい、今はオニクス・ドラゴンのダシルと一緒に、竜騎士として奮闘中……って言いたかつた？」

レナードは言葉をなくします。

「パットは、南街区生まれの平民として生活していて、近所のレンと幼

なじみ。もともとは両親と妹がいたけど、馬車にひき逃げされて家族を失い、レンと共に生活していて、戦争が始まって食べ物を探めていたところをレンと一緒に貴族に捕まり、アンリと言う人に助けられて、レンと魔法を学び、アムリオンーの名医・ソリスの弟子となって医学を勉強し、魔法医になったんだよね。動物と心を交わす能力が目覚め、それを生かして、人間、動物、妖精など構わず診察し、たくさんの命を救ってきて、今や有名人……と言ったところかな。」

パトリシアは凍りつきました。

「どうして、そんな詳しいことまで。」

「そして。」

マイナーレは続けます。

「2人とダツシユは過去に行き、歴史を変えた。貴族による圧政もなくなり、レンとパットの家族も救えた。歴史を変えたことにより、レンは正式な騎士になり、パットは魔法学校を卒業することからやり直しにはなったけど、歴史を変える前よりは断然に幸せな日々になった……って言ったらいいかかな?」

「さすがにその経験者でも、ここまですら言えない。」

レナードは額に手を当てます。

「あつ、それ、レンの癖だ。」

「げつ、それも知ってるのかよ。」

レナードは慌てて額から手を離します。

「癖と言ったらパットも……。」

レナードに横目で見られたパトリシアは、無言でレンの足を踏んづけます。

「間違いない。やっぱ『パット』だね。」

「えっ?」

パトリシアはマイナーレに聞きます。

「あのき、それもパットの癖。レンやダツシユにからかわれると、無言で足を踏んづけるやつ。歴史が変わる前の幼いパットは頭つ突きだったけど。」

すると、2人はマイナーレに聞いたように詰めます。

「怪しい。幼い頃まで詳しく知ってるの、歴史を変えてからは2人だけなんだけどな。」

マイナーレは落ち着いているような顔を作りました。

「やっぱりそうだったんだ。何かの縁かも。」

マイナーレはそつと部屋を出て1階に降りると、リビングに忍び込みます。妖怪姿なので足音1つ立てずに、ランドセルから本を取り出すことに成功しました。もともとランドセルのふたが開いていたことがよかったようです。その本は、「魔法医トリシアの冒険カルテ 竜の騎士と伝説の名医」です。

急ぎつつ慎重にリビングを出ると、部屋に戻りました。マイナーレは妖怪の力が凄まじいものだ、改めて思い知りました。

本のブックカバーを外して2人に見せます。

「これ、見てよ。」

「!」

レナードとパトリシアは口をあんどり開けました。

「ちよつと待ってよ、これ、私じゃん!」

「隣にいるのは俺だ。」

2人は表紙を指差して、ついにマイナーレから本を奪い取りました。

パトリシアの本をめくる手が止まりません。

「これは…7年前のアムリオンに行つて、貴族の反乱を防いだ、あの時のことだ。」

「ああ、最後の最後までダッシュに邪魔されたな、トリシア……、今はパットでいいのか。」

マイナーレはレナードの言葉に反応しました。

「あつ、今の台詞、この本と2人の関係性を示す、決定的な証拠となりました! やっぱり2人とも、この本のトリシアとレンだったんだ。ああ、2人がヒロインとヒーローだったなんて!」

レナードは苦笑いをします。

「俺がパットのことをトリシアつて言ったことだろ? て言うか、俺、ヒーローじゃないし。この本を見た限りじゃあ、パットが主人公だし

ね。」

「7年前に行ったとき、仮面の神っていう闇の魔法の使い手にとどめを指したのは、この私。別に、私が主人公で間違ってるんでしょ？」
パトリシアは胸を張ります。

レナードはパトリシアを横目で見ながら、ため息をつきました。
マイナーレはそのやり取りが夢のようでもありますが、違和感がありました。

それは、この2人が実の弟と妹だということです。
「もしかして、あの人、人間界で私たちの話を書くために、アンリ先生に頼んでちよくちよくこっちに来てたんだ！『南房秀久』って自分で名乗ってたし。」

パトリシアは原作の方と面識があるようです。

レナードは原作の『レン』と同一人物で、パトリシアは原作の『トリシア』と同一人物だということです。

マイナーレは言います。

「きつと、私がこの本に導かれたのも何かの縁か、運命だったのかな。」
「縁でも運命でもなく、元からそういう結果だったんだよね！」

パトリシアは満面の笑みで言いましたが、レナードがまた、額に手を当てて、

「だから、そういうのを『運命』って言うんだよ。」
と言います。

マイナーレはパトリシアの前に置かれた本を引き寄せました。

「あの子、レンとパットってこれ持ってる？」

マイナーレは床に横たわるようにして置いてある、巻物を取りました。

「持ってるよ、でも、俺のもパットのも、端が破れてるんだ。」

「あつ、さつき目の前に急に出てきたやつだ！持ってる、持ってる。」

2人はポケットから巻物を取り出して広げると、テーブルに置きましました。

「みんな破れてるところが違うな…。姉ちゃんのは左端、俺のは両側、パットのは右端……。」

レナードは腕を組んで3つの巻物とにらめっこします。

それを聞いたマイナーレが即答します。

「それって、こういうことじゃない?」

マイナーレが巻物を一直線に並べました。右から、マイナーレの巻物、レナードの巻物、そしてパトリシアの巻物の順に。

破れ目が全て一致しました。

「つてことはよ」

レナードはマイナーレとパトリシアに目配せをしました。

「元は巻物が1つだったんだ!」

パトリシアはそう言うとお慢げになります。

「そういうこと。誰かが破ったんだろうな。」

レナードはパトリシアを見てうなずきます。

「でも……誰が、何のために破ったのかな……。」

マイナーレが言ったとたん、冷たい空気が3人の間を通りすぎました。

「……破らなきゃいけない出来事があつたつてことだな。」

「目的がなければ、普通、そんなことはしないもんね。」

パトリシアはあごに指を当てます。

「……ねえ、妖魔界で『奇跡の子』について何か情報はないの?」

マイナーレが聞くと、パトリシアは当たり前前だというような顔をして、うなずきます。

「あるよ。人間界には?」

「ないよ。もし、あつたらオカルトの方で有名だろうし。今はネットがあるから、もっと有名になってるつて。」

そのやり取りを聞いていたレナードは、2人に提案をすることになりました。

「妖魔界に行つて調べてみるか。」

「人間界で暮らしてたお姉ちゃんを妖魔界に連れていくの? 大丈夫なの?」

パトリシアは怪訝そうです。

「大丈夫だよ。どうやら、私には両方の世界を行き来できる力がある

らしいから。巻物に書いてあった。すぐに戻ってくれば大丈夫だと思おうよ。」

マイナーレ自身、それが本当なのか自信はありませんが、自分の中に流れる血がそう告げているのです。

「あと、1つお願いがあるんだけど。」

レナードとパトリシアはマイナーレに目で促します。

「私のこと、あだ名で呼んでいいから。だって、生まれたのは同じ日なんだし、上下関係もないに等しいでしょ？」

「まあ、そうだな。今までパットとも兄妹とは思ってなかったから、な？近所の幼なじみぐらいにしか。」

「うん。じゃあ、今まで通り『レン』でいいかな。お姉ちゃんは……『マイ』かな？」

「いいよ、『マイ』で。私だって、2人が弟と妹なんていう実感ないし。むしろ、『お姉ちゃん』の方が気持ち悪い感じ。」

マイは苦笑します。すると、レンがパトリシアに尋ねます。

「じゃあ、パットはどう呼んでほしいんだよ。」

「うーん、『パット』だとなあ、私だけカタカナ3文字だよ。じゃあ、

『ミア』はどう？」

「えっ、ミア？」

マイとレンはパトリシアを凝視します。

「だって、マイは英語で M—a—i でしょ？ a と i を入れ換えると……？」

パトリシアは手のひらに指で書きながら説明します。

「入れ換えると、 M—i—i—a ……ミア……そういうことね！」

「へへー、どう？頭いいでしょ？」

パトリシアはまたも自慢げになりました。

「自分で言うな。」

レンはため息をつきます。

「じゃあ、『ミア』にするか。仕方ねえな、本人がそう望んでんだから。」

「私はいいいニックネームだと思うけど。何か、ニックネームが全員2文字で、私たちの一体感が強くなった気がするね。」

マイはミアに微笑むと、真剣な顔になります。

「じゃあ、妖魔界、行こうか。」

「そうだな。」

「うん。」

レンとミアはうなずいて立ち上がります。

いつの間にか、人間界と妖魔界を繋ぐ道は閉じていました。

マイも続いて立ち上がると、サファイアを首から外して左手に持つと、それを掲げました。

「またもや、勝手に言葉が口からこぼれます。」

「我は奇跡の子なり。我の力を使い、道を開けたまえ。」

再び、黒い穴が頭上に現れました。

マイがサファイアを道に投げ入れると、3人はその穴に吸い込まれました。

? 妖魔界

妖魔界。一体どのようなところなんだろう。

穴の中に入ると、体は横倒しになり、まるで空を飛んでいるかのようでした。

目の前には、自分が投げ入れたペンダント『サファイア』がいます。

「レンとミアが暮らしている世界に。あの本の世界に。」

マイが前をきつと見据えた時、サファイアの向こう側に小さな光が見えました。それはだんだんと大きくなります。

「眩しいー!」

三つ子は石畳が敷かれた噴水の前に降り立ちました。

ここは妖魔界の中でもアムリオン国という国の中です。三つ子がいる噴水の広場は、アムリオン国王都の中心地です。

「おっと。」

「よっ。」

「おっとつとつと、きゃっ!」

マイとレンはミアを見下ろします。

「あはは、着地失敗。」

マイはミアに手を差しのべます。

「大丈夫?」

ミアは頭をかき、マイの手を取って立ち上がり、服の土ぼこりを払いました。

「妖怪の力っていうもんが目覚めたというのに、相変わらずだな、トリシア…:じゃなくてミア。」

レンが意地悪そうに笑うと、ミアはほほを膨らませました。

「心配してくれたっていいじゃん。」

「まあまあ、ていうか、2人ともさつきと髪の色が違うよね、目の色も。」

マイが言うと、レンとミアは自分の髪を触ります。

レンは赤髪の青い瞳で、ミアは茶髪の茶色の瞳です。

「ほんとだーって、マイもだよ。」

「えっ!」

マイも自分の髪を触ります。髪の色は確かに違いました。しかし、今まで見たことがない色だったのです。

「茶色い……私、人間界では黒髪なのに……? ねえ2人とも、私の目の色って黒っぽいでしょ?」

レンとミアは首を横に振ります。

「私と同じくらい茶色いよ。」

「うそ……。」

マイは再び変わった自分の容姿を受け入れきれいていません。

「でも、それが妖魔界に来た証拠だよ。俺とミアのこの姿は、ここだけの姿だからね。」

レンがマイの髪を触ると、

「茶髪もかわいいじゃん。」

と、無邪気に笑ってみせます。

「誰が私を褒めろって言った?」

マイはプイッと横を向きました。そして、レンを横目で見ます。

「あと、誰も私たちの第三の目が封印されているって気づかないんだ。」

いつの間にか、三つ子の額には例のシートが貼られていました。

「そういえば、そうだな。」

「気づかなかった。」

2人の反応にマイはため息をつきます。

「それに、私のこの格好、どつからどう見てもよそ者の怪しいやつにしか見えないんだけど。ミア、服貸してくれない?」

マイはパジャマに着替える前の、部屋着のままでした。

「マイっていろんなところに気づくね。あつ、それなら。」

ミアは苦笑いして、レンに目をやります。

「その目は、まさか……。」

レンはミアの方を見ずにつぶやきました。

「そのまさか! せっかくだし、マイの服を買おうかなって。」

ミアはレンの肩をポンと叩き、レンの顔をミアに向かせてから言い

ました。

「レンのおごりです。」

「やっぱりか。……って、何で俺の小遣いから？自分ので買えばいいじゃん。」

「だって…ほら、ね。レンって結構持つてんじゃん、お金。」

「そうなの？」

マイは少し驚いてレンに尋ねます。

「一応、正式な騎士だからね。貴族じゃないから給料も貰えるし。」

「らしいね。それは知ってるけど、具体的には私も知らないからね。」

マイはミアにも尋ねます。

「ところで、服を買うのって東街区？あそこならたくさんありそうだしね。」

東街区は商人の街ともいわれ、昼間には買い物客でにぎわいます。

ミアはマイの言葉にぎよっとします。

「そんなことまで知ってるの。マイって一体、何者？」

マイはにんまりします。

「私は、ただの『トリシアオタク』。レンとミアほどは知らないけど、ある程度なら、このことは知ってるよ。」

「はあ。そうなの。」

ミアはあつげにとられます。

「ここで話してるのもなんだし、とりあえず私の服貸すから、私の家に来て。」

ミアはそう言うと、南の方角に歩き始めます。

ミアが住んでいるのは南街区だからです。

マイとレンはミアについていきます。

「それにしても、アムリオンって日本とは違ったよさがあるよね。街並みがちよつとヨーロッパっぽくて、統一感があつて。」

マイは辺りを見渡しながら言いました。

「まあ、王都はね。どう？本でしか知らなかった世界に来てみて。」

レンがマイの方に振り向きます。

「まだ来たばかりだからなんとも言えないけど、今のところ最高で

「しょー！」

「マイは右手の親指を立てました。

しばらくして。

「着いたよー！」

「ミアはマイとレンの方を向いて、両腕を広げました。

「ミアの後ろには、薄い茶色のレンガの壁に赤い屋根の家があります。」

「ここが……ミアの家。」

「マイは目の前の家を見上げました。

「それで、こっちがレンの家。」

「ミアが右手で指し示した方には、白い壁に黒い木の板が格子状に打ち込まれた、屋根がこげ茶色の家がありました。」

「レンの家の庭、広いね。」

「まあ、しょうがないよ。レンの家族は私の家族よりはお金持ちだからね。じゃあ、入って。」

「ミアがドアを開けると、マイを先に通します。」

「どうせミアのことだから時間かかるだろ？俺は外で待つてる。」

「よくご存知で。はいはい。」

「ミアはレンを置いて、家の中に入りました。」

「数分後、レンはミアの声がこちらに近づいてくるのが分かる」と、ドアのすりガラスに顔を近づけました。すぐそこに2人がいます。」

「やっと終わったか。」

「レンがくるとドアに背を向けたその時。」

「ミアが玄関のドアを勢いよく開けました。」

「ドアの向こうに人影が見えました。」

「(まずいー)」

「マイがそう思った瞬間。」

「ドンッ」

「っ！」

「あつ、ごめん。レン、何でこんなドアの近くにいるのよ。」

人影がくずおれます。

マイは嫌な予感がして、すぐさまドアの向こうに回り込みます。

「レン、大丈夫!？」

レンは首を横に振った上、何も言葉を発しません。ひざまづいて両手を地につけ、口を開けたままで、目も見開いたままです。

「もう、レンったら。……って、レン!？」

ミアもようやく事態に気づきました。

レンは自分の両手で自分の首を覆います。ミアに視線を送ると、ミアはレンの言いたいことが分かったようです。

「それって、チョークサイン……。まさか!？」

「レン、呼吸が!？」

マイにもレンの暗示が分かりました。

レンの顔が青白くなってきています。

「ミア、どうすれば!？」

「大丈夫。任せて。」

ミアはレンの胸の辺りに両手を近づけます。

「正常な呼吸を取り戻せ。ファイ・ビータ・アツシユ!？」

ミアの両手から、やさしいオレンジ色の光が放たれました。その光はレンの胸に吸い込まれました。

「本物の、魔法だ……。」

マイは思わず見とれてしまいました。

「……はあ、はあ。」

レンの呼吸が戻りました。青白かった顔に赤みが差します。

「よかったー!？」

マイとミアは胸をなでおろします。

「あぶね、死ぬところだった。うっ、背中痛え……。」

レンは背中に手を回します。

「待って、触らないで。」

ミアがレンの手を掴みました。

「ドア、背中にぶつかったんでしょ?様子を診るから家に入って。」

3人は中に入り、ミアはレンの服をたくし上げて背中を出させます。

「うわあ、もうアザになってる。アザの周りはどう?」

ミアがアザの周りからだんだん中央に向かって押していきま
す。アザの指1本分外側にミアの指が触れます。

「いてててっ!」

「なるほど、ここら辺からもう痛いよね。」

ミアはうつむきました。

「レン、本当にごめん。……怪我させたお詫びに、完治させるから。」
ミアは両手でアザを覆うようにして、再び呪文を唱えます。
さっきのものとは違うようです。

「優しき光が痛みを大河のごとく流し取る。ルイト・アン・ルート!」

レンの険しい顔がみるみるうちに穏やかになっていきました。

「……治ってる。完全にアザが消えてる。やっぱり、アムリオン1の
名医の実力はすごい。」

ミアはあまりの治りの早さに圧倒されます。

「ミアは、治癒魔法 だけ は 得意だからな。他は……。」

「余計なこと、言わない。」

ミアがすかさずレンの背後から手を伸ばし、口を封じます。
ふがふが言っているレンを見て、ミアは思わず笑ってしまいま
した。

「治ったんだったら、さっさと買いに行くよ!」

ドアを開けようとしたミアに向かってレンが突っ込みます。

「全く、かなり遅れたんだから。誰かさんのせいで。」

ミアがその言葉を聞いて振り返りました。

「あははは。レンのことは気にしない方がいいよ。」

ミアは2人の間に入り込みます。

これでようやく買い物に行けました。

3人は商人の街・東街区にやってきました。

「着いたよ!」

先頭でミアを案内していたミアが、体ごと後ろに振り返って両

腕を広げました。

この時間はお昼時というのもあり、かなりの賑わいです。

道の両端にはびっしりとお店が並び、それぞれが看板やのぼりを出しています。

「わあ……ここなんだね。すごい。」

マイは360度見回すと、ミアに手を引かれました。

「おすすめのお店、紹介するね。今はちようど昼ご飯の時間だから、服屋は混んでないと思うけど。」

すぐに気に入った服が見つかったらしく、ものの10分で店から出てきました。マイは既にも買った服を着ているようです。

マイが買ったのは、インナー、シャツ、スカートのセット。

インナーは紺色で袖がなく、襟首にはぐるりと一周にレースがあしらわれています。

シャツは淡い水色で、袖はクリーム色。襟の下の中央には雪の結晶の形をしたスパンコールがあり、その両端に白の丸いスパンコールが並んでいます。

スカートはレイヤースカートで、濃い水色、淡い紫、濃い水色の布の3段重ねで各裾にフリルがついています。ウエスト部分はダイヤモンド柄です。

「改めて思うけど、やっぱり日本にはない独特な雰囲気。すごい新鮮。」

マイの喜ぶ顔を見た後、レンは財布を見てホッとしました。

「セットものでよかった。これをバラで買ったらいくらになったか……。」

レンはすぐそここの建物に掛かる時計を見ました。

「もうすぐ昼だな。腹減った。どっかで食べるか。」

すると、

「えっ、ホントに……じゃあそこのおいしそうなランチやってるところがいいー！」

食べ物の話になるとなぜか話を聞くミアが反応しました。

レンはミアが指さした方に目をやります。

「そこは高級すぎてダメだって、何度言ったら。フレンチフルコースは絶対無理。」

ふくれるミアを見て、マイが言います。

「もつと気軽に入れるお店はない？セルマのところとか。」

「あつ、セルマのことも知ってるんだ。……だったらそこでいいや。どうせそこに知り合いがいるし、ついでだからマイに紹介するよ。」

レンの言葉に、マイは小さく叫んでしまいます。

「マイ、そこに誰がいるかももうわかってそうだけど。」

「全員知ってるわけじゃないけど、そこで働いている人なら知ってると思う。」

「まじかよ。」

「すごい。生の『三本足の洗い熊亭』だ。」

『三本足の洗い熊亭』とは、飲食店 兼 宿屋で、セルマというピカイチの料理の腕をもつ女性が経営しているお店です。実は彼女、弓の腕も一流です。

ミアが扉を押して開けます。

「げっ、何かみんな集まってるし。って、アンリ先生まで！」

ミアはアンリに一直線にかけていき、ハグしました。

「アンリせんせ〜い、何でこんなところにいるんですか〜？」

アンリと呼ばれた男性は、ミアの頭を撫でます。
と、

「何だよ、『こんなところ』で悪かったわね。」

カウンターの奥の方から声がしました。そう、この人こそセルマです。

マイは目の前の展開についていけず、扉の前で立ち尽くしています。

「ほら、そのあんたも入ってきた。こいつらは新入りを拒むことはないから。」

セルマに手招きされたので、マイは隣にいるレンと目配せをしてから、おずおずと中に入りました。

マイは周りを見渡し、自分が本で知っていた記憶と照らし合わせま

す。

あそこにいる おぼんを持つている3人は、半分吸血鬼のフィリイ、人魚のアーリン、ケンタウロスの子孫のミノン。

左のテーブルに座っているのは、アムリオン王国第二王女のキャット、豪商の娘のベル、サクノス騎士団長の息子のシヨーン、呪歌使いのアーエス、ナルシストな貴族のセドリック。

右のテーブルには、アムリオン王国第一王女のアム、宮廷魔法使いと魔法学校の先生のアンリ、オキニス・ドラゴンのダツシユ、エメラルド・ドラゴンのライム。

「ここにいる人のキャラ濃すぎでしょ。カオス。」

誰がいるのかを確認したマイは、ボソツと口からこぼしました。

「あれ、グウエン?」

「ユノ、あんたもいるんだ」

レンとミアが同じ方を向いています。

マイもそこに目を向けると、カウンター席に女の子2人が座っていました。グウエンは人間界で言うと高校生くらいで、ユノは小学校低学年くらいです。グウエンはレンが転生後に一緒に暮らす家族で、姉にあたります。ユノはミアが転生後に暮らしている家族で、妹にあたります。

「レン、まさか彼女連れてきたの?」

グウエンが、マイを指さして尋ねます。

「ち、違うって! まあ、その、今日午前中に色々あって、ここに来た。」

すると、アムが立ち上がってマイの目の前まで来て名乗りました。

「私はアムリオン王国第一王女の、アムレディア・ド・アムリオン。親しい方は私をアムと呼ぶから、アムと呼んで。よろしくね。」

アムは手を差し出します。マイも握り返して、

「はじめまして。氷山マイナーレと言います。マイと呼んでください。」

と言いました。

「とりあえず、トリシアとレン、マイも座りな。お茶出すから。あつ、私はセルマだ。」

3人にダーズリンティイーが入ったカップを出しながら、セルマがレンに聞きました。

「さっき言ってた『午前中に色々あった』って、何があったんだい？」

レンは目を伏せ、少し沈黙が続きます。

「僕とトリシアとマイの人生に関わることが分かったんだ。今までのことと、これからのことも。人間界のことはマイが話してくれる？」
「分かった。」

マイは、妖怪の力が目覚め、過去の記憶が甦ったことでレンとミアを思い出し、妖魔界と人間界を結ぶ道を開けて2人と再会したこと。喋る巻物（後のサファイア）に書いてあった『奇跡の子』の情報を探るべく、妖魔界に来たことをみんなに伝えました。

「奇跡の子……、あなたが！」

アムが何か思い出したようです。

「魔法使いの父と妖怪の母をもつ、妖魔界の架け橋と言われているわ。奇跡の子は三つ子のきょうだいだから……まさかだとは思わなかった。」

アムはゆっくりもレンとミアの方を見ました。

「そう、私たち三つ子のきょうだいだったの。」

「えっ、ちよつと待ってよ。私はレンの姉じゃないってこと？」

カウンター席のグウエンがサツと立ち上がって、自分を指さします。

「そういうことだ。さっき、マイは記憶が甦って、『僕とトリシアと死別した』って言った。僕とトリシアは転生して今、ここにいます。」

ミアもレンに続いて重々しく口を開きました。

「ユノ、実はユノのお姉ちゃんじゃなかったの。」

「お姉ちゃん……、じゃない。」

場は困惑の空気が流れ、沈黙が続きます。

そんな中、ベルが誤魔化すように喋りだしました。

「そ、それならトリシアとレン先輩はくっつけないわね。レン先輩は私のものよー！」

ベルはレンが大好き。ベル曰く、一目惚れだったとのこと。

「な、何ですって?」

ミアが反応します。

「今まで他人同然として生きてきたから、私だって複雑なの!でも、レンは渡さないからね!」

「相変わらずだなあ。」

眉をひそめるアンリ。

しかし、ミアとベルによる、レンを巡って起こる言い合いは『本』の中ではよく行われており、目の前で見られたマイは少し嬉しくもあるのです。

場の空気がよくなったからか、マイは質問攻めに合います。

「人間界ってどんな感じなんですか?」

「俺みたいなドラゴンって人間界にいるのか?」

「魔法使えるの?」

などなど。

「まだ世の中のこととはあんまり知らないけれど、できる限り答えます。あの、1人ずつお願いします。」

マイは手を合わせると、少なくとも30分は質問に答える羽目になりました。

質問攻めのほとぼりが冷めると、アンリがマイにこんな提案を出しました。

「さつき、魔法学校の『星見の塔』を知っていると聞いていたね。マイ、魔法習ってみないかい?人間界の学校では、こちらでいう普通科は学んでいるみたいだから、魔法科だけでも受けてみたらどうだろう。」

「えっ、アンリさん、いいんですか!ぜひ!」

こんな訳で、マイは星見の塔に魔法を習いに行くことになったのです。

最後に、ミアが一言。

「私のこと、これからミアって呼んで!だって、マイ・レン・ミアだと言葉のリズムがいいでしょ!ってことで、よろしく!」

？ 魔法学校

「そう言えば、まだ診療所見てないよね？」

昼食を終えた三つ子は『三本足のアライグマ』亭をあとにしました。
ミアの質問にうなずいたマイは、

「この隣でしょ？」

と、2階建ての小さな建物を指さします。

「やっぱり知ってるんだ。」

レンは半分呆れたような顔をしました。

白いレンガで舗装された小道を抜けると、ツギハギだらけの診療所の目の前までやってきました。

『トリシアの診療所 患者は人・動物を問いません』。この看板も本当にあるんだね。」

ドアの横に掛けられた看板。これこそ、この代名詞です。人間はもちろん、犬、猫、妖精、ドラゴンまでもミアが1人で診るのです。

ミアがドアを開けました。すると、

『トリシアー！おかえり！』

青い毛むくじやらの生き物がミアに飛び乗りました。

「ただいま、ポム。って、また何か盗み食いましたでしょ！」

ポムの口の周りにジャムがくっついていきます。

『うん、お腹がすいたから台所のクッキー食べたよ。全部食べた。』

「ちよつと、それ今日のおやつにしようと思ってたのに！私のイチゴジャムクッキーがー！」

「えっと、なんて言ってるの？」

ポムの言っていることが、マイには分かりません。ただ、ピイピイという鳴き声にしか聞こえないのです。

「私のクッキー勝手に食べたんだって！しかも全部！だいたいおやつはポムに食べられちゃうの。」

実は、ミアは他の誰もが持っていない能力(チカラ)があります。それは『どんな動物とも心を交わすことができる能力』です。それを活かして、ミアは医師 兼 獣医師をしています。

ポムはドラゴンの子供ですが、その割に体が丸っこく、翼も小さなものなので飛ぶことができません。ミアが獣医師になる前に初めて手当てした動物が、このポムなのです。

『ねえ、この女の子誰?』

「お姉ちゃんのマイナーレ。あと、レンのお姉ちゃんでもある。」

『お姉ちゃんいたの!?!』

ポムとマイの目が合います。ミアの通訳でマイはポムが驚いているのがわかりました。

『……トリシアとレンのお姉ちゃん。うん、あれ、どういうこと? 2人は……えっ、でも……。』

「あー、説明しないとね。私たちのこと。」

そう言っつてミアは待合室の長椅子に座ると、ポムを膝の上に乗せました。マイとレンもミアの両隣に座りました。

ミアが説明できないマイの境遇や、レンが説明したところはミアが代わりに通訳しました。

ポムは素直に受け入れたようでした。

『そうだったんだ。妖怪とかよく分からないけど。じゃあ変化（へんげ）とかできるの?』

マイはうなずきます。レンとミアに目配せをし、3人同時に額のシートを剥がしました。

ポムはミアの膝から飛び降り、後ずさりしてしまいました。

『トリシアもレンも、ずいぶん変わっちゃったね……でも、かつこいいいよ。』

「ポム、ホントに? 怖くない?」

『ちよっと怖いけど。』

ミアの通訳を聞いたマイは、ホッと一息つきました。

「あと、私のこと、『トリシア』じゃなくて『ミア』って呼んでほしいの。」

ピィ、と返事したポムは、マイの足元のおいを嗅ぎ始めました。

『これがマイのにおい。うん、ミアより優しそうなおいがする。』

「ポム、何だっつて?」

ミアがポムのほっぺをつねるところを見たレンは、「何言ってるか分かつちゃうのも大変だな。」と苦笑します。

ミアの怒りが収まったところで、診療所の中を案内してもらいました。

診察室や調剤室、入院患者用の部屋も見せてもらいました。

「診療所だけど入院もできるんだね。」

「短期間ならね。10人までならできるよ。」

診療所の1階は仕事場、2階が居住地のようです。

2階に上がると、皿洗いをしている女性がいました。

「マルテさん、ただいま！」

「おかえり…って、あなたがマイさんね！」

マルテは診療所で働いてる、家政婦 兼 看護師のような人です。ミア自身は普通に家事ができますが、忙しい時にはマルテに頼むことがあるそうです。

ミアがマルテの子どもを治療し、助けたことへの恩返しとして、マルテは自らここで働いているのです。

手を拭いたマルテがマイに握手を求めました。

「はじめまして、氷山マイナーレです。よろしくお願いします。」

「さつき、トリシア先生とレン先生が人間界に行く前に、話は聞いたから大丈夫よ。」

「レン先生？」

マイは頭をレンの方に向けます。

「あ、ああ。」

レンがわざとらしく咳払いをしました。

「薬剤師やってるんだよ。実は。」

「そうなの!？」

「治療魔法はミアほどできないから、何か代わりになるものがあればって思ってた。それで薬のプロになった。」

「たまにトリシア先生、調合間違えて診療所吹き飛んでたけど、レン先生が薬剤師になってからはなくなったわね。」

「！」

マルテにからかわれたミアはぐうの音も出ず、それを見てマイとレンは大爆笑。

「そうだ、マルテさん。これから私のことを『ミア』って呼んでください。」

「ミア？ 『パトリシア』の名残がないけど。」

「えっと、半分妖怪・半分魔女、医師 兼 獣医師としての自覚を持つための、ちよつとしたイメチェンです。」

ふふつと笑ったマルテは、「分かりました、ミア先生！」と言ってミアの肩を叩きました。

「あつ、見回りにいかなくちや。」

レンは仕事に戻るようです。

「午後からの診療、ちよつと今日は休んでいいかなあ。妖力が目覚めて疲れちゃった。」

レンを送り、ミアがあくびをして自室に行くと、マルテに尋ねられました。

「マイさんは、これからこっちに住むのですか。」

これはマイも考えていたことでした。

「いえ、私は人間界に帰ろうと思います。両親が心配しますし。星見の塔には人間界から通うことにします。」

「人間界の学校もあるのにな？」

「そこはアンリさんと話し合って、なんとかしてもらいます。」

「そうね、アンリさんならなんとかしてくれそう。」

マルテは納得した様子で、皿洗いを再開しました。

そうと決まれば、もう帰らなくてはなりません。人間界に何時間もないので、親が捜しているかもしれないからです。

そこで、レンとミアには置き手紙をすることにしました。

『レンとミアへ』

両親が心配するから人間界に帰るね。

星見の塔は、人間界から毎日通おうと思う。

2人とも忙しいみたいだから、これからのことはまた今度話そうね。

また明日。マイより』

マイはミアの自室に入りました。すう、すう、と寝息を立てて寝ているミアを見て、マイは気づきました。

「そっか、レンとミアは2回も人間界とこつちを行き来してるんだもんね。1回通っただけの私でもこんなに疲れたのに。」

医学関係であろう本が積まれている机に、手紙を起きました。ミアの頭をそつと撫でると、部屋を出ました。

「ではマルテさん、また明日。」

手を振ってにこやかに返すマルテを確認してから、マイはペンダントのサファイアを外します。

「我は奇跡の子なり。我の力を使い、道を開けたまえ。」

天井に現れた黒い穴にサファイアを投げ入れ、マイは穴に吸い込まれました。

次の日、マイは星見の塔に入学しました。途中入学だったので、さつそく授業です。

「はい、今日は基礎である、魔力を集中させる練習をするよ。」

途中入学と行っても、先週から新学年が始まったばかりなので、マイはあまり遅れを取らずに済みました。

「まずはお手本を。」

アンリは手刀を作って構えると、一瞬で人差し指と中指の間に火花を散らせました。

「おお。」

声を漏らす生徒たち。

「魔力が集中すると、エネルギーが集まって高温になる。コツは、指に自分の意識を集中させること。こうすれば——」

アンリはまた火花を散らしてみせます。

「さあ、みんなもやってみよう。」

生徒たちは難しそうだと思ったのか、嫌な顔をしました。が、1人だけ反応が違いました。

「先生、これでいいですか。」

マイでした。

「マイ、すごい！」

「えっ、もう1回見せてくれよ！」

「もしかして予習してきたの？」

マイの周りには人垣ができました。

「予習はしてないよ。身近に魔法使いがいるからかな。」

「身近に？誰？」

「南街区で診療所をやってるトリシアと、魔法竜騎士のレンだよ。2人は私の妹と弟なんだ。」

「あの2人のお姉ちゃん!?マジで！」

授業そっちのけで質問をする生徒たちに、アンリは手を叩きます。

「はいはい、質問タイムは授業が終わってから。席に着きなさい。」

返事をして、生徒たちは自分の席で、魔力を集中させる練習をしました。

初めての魔法科の授業が終わった後、マイは王城の広間にいました。さつきキャットから「授業が終わったら私のところに来るよ。に。」と伝言を受けたのです。

「あの、何の御用でしょうか。」

マイはできる限りの敬語で尋ねます。

「これは私の勘でしかないんだけど、あなたってこの世界に来る前から、私たちのことを知っているのではと思って。」

マイの心臓の鼓動が速くなります。

「昨日初めて会った時、どうやらあそこにいた全員を知っているようだったわ。」

「どうしてそれを。」

「簡単よ。時々人間界から来る作家を名乗るあの人の、あの人の本を読んでいるのでしょうか？」

「はい……。」

アムは納得したようにうなずくと、召使いから本を受け取りました。

「これは、王立図書館の一般人は立ち入ることができないところに保管されている本よ。ここを見て。」

マイは玉座に歩いていき、アムが指をさすところを見ました。

8月3日、アムリオン国王子のハクト殿下と沢白国王女のレンユイ殿下の間に三つ子がお生まれになった。程なくしてレンユイ殿下は崩御あらせられた。生まれた三つ子の額には第3の目があったため、民は奇跡の子の誕生を喜んだ。しかし、言い伝えにより、ハクト殿下は宝具を使われて第3の目を封印なさった。それにより、ハクト殿下も崩御あらせられた。三つ子は忌まわしき存在として、沢白国王によって人間界へと流された。

そして、挿絵の写真に、ハクトとレンユイが写っていた。

「2人が、私の両親……。」

レンにそっくりなハクト、マイとミアにそっくりなレンユイが、にこやかに微笑んでいる。

「あの、言い伝えて何だったのですか。」

「それは……『第3の目を額に持つ者が現れた時、世界は滅ぶ』。」

ゴクツと、マイは唾を飲み込みました。滅ぶって……。

「あと、ハクト様は私の母方の伯父よ。私たち、いとこなの。」

い、いとこ!?

「じゃあ、改めてよろしくね、マイ。」

「よ、よろしくお願ひいたします。」

アムから差し出された手を、マイは両手で握り返しました。そして、アムは少しかがんでマイをハグしました。

「!」

「あら、人間界にはこういう挨拶はないのかしら。」

本のことをレンやミアに伝えるため、本は1週間貸してもらえるところになりました。

マイは朝から夕方まで小学校で授業を受け、夕食を食べて睡眠をとり、夜中から明け方まで星見の塔で魔法を習う、という多忙な生活を送りました。

小学校では毎回のテストで100点を取り、星見の塔では成績優秀でどんどん飛び級していきました。

そんな生活を続けて約1年。マイは平均で3年かかる魔法科を、たったの1年で卒業しようとしていました。

「今日はみんな分かっている通り、卒業試験だ。みんなの健闘を祈っているよ。」

アンリはそう言つて、教室を出ていきます。代わりに入つてきたのはレンでした。卒業試験のお手伝いに呼ばれた、なんて言つてたっけ。

周りは教科書やノート、参考書を見て最終確認をしていますが、マイはしませんでした。

「直前に詰め込んだものは、実力ではない。」

レンはアンリから教えられたことを、今日の朝、マイに伝えてくれました。

「これから問題用紙と解答用紙を配ります。配られた人から、解答用紙に名前を書いてください。」

レンとマイの目が合います。

(頑張れよ。)

レンは声を出さず、そう口を動かしました。マイはうなずきます。

「始めー!」

レンの合図で、みんなは一斉に問題用紙を開きました。

午前は筆記テスト、午後は実技テストで、マイは筆記テストを満点で合格していました。

合格者のみ、掲示板に受験番号が書いてあるのです。

「マイ、筆記合格おめでとう!」

筆記テストの採点を手伝ったレンが、マイに歩いてきました。

「よし、じゃあ実技に行つてくるね。」

「うん、マイならできるよ。」

親指を立てたレンに、マイは同じように返すと、星見の塔の中に入つていきました。

「これから実技テストを始めるよ。」

会議室のようなどころに集められた生徒たち。

「実技テストは、僕が作った魔法の世界の中に入つて、受けてもらう。」

そこでは色々な試練が待ち受けている。そして、ここに戻って来られれば合格だよ。」

壁に沿ってワープホールのようなものが並んでおり、生徒たちは、自分専用のワープホールの前に立ちます。

「行ってらっしゃい。」

アンリが言った途端、ワープホールに吸い込まれました。

ここはどこ。一体、どこにいるの。

見渡す限り真っ黒な世界に、マイは寒気がしました。

「闇を見通す黄金の目、スール・ドウ・カット。」

マイは『ネコ目』の呪文を唱えました。

周りが見えるようになったマイは驚愕しました。

ボロボロの床に朽ち果てた柱。あちこちにクモの巣が張っています。家具もありますが、今にも崩れそうです。

「ここからどうすれば……。」

すると。

「う……うつ……誰か……。」

「ぎゃっ！」

突然の声に、マイは叫んで飛び上がりました。

「誰か……助けて……。」

向こうのチェストがガタツと揺れます。

マイはそこに駆けていき、チェストの下を覗くと、人影を見つけました。

「今すぐ助けます！持ちあげろ、フレアゲルト・テュース！」

呪文に加えて人力も使って、チェストを退かしました。

チェストの下敷きになっていたのは、人ではなく、妖精のアールヴのようです。

「助けていただき、ありがとうございます。私はリユドミラと申します。あなたのお名前は？」

「私は氷山マイナーレです。」

「マイナーレさん、ここを出しましょう。」

リユドミラは立ち上がりますが、よろよろとくずおれます。

「はっ！リユドミラさん、怪我は？」

「足をやられたみたいですよ。」

確かに右足に深い傷があります。よく見ると、なぜか金属の破片がついていました。

「もしかして……鉄？」

リユドミラの顔色がどんどん悪くなっています。

鉄はアールヴにとって、魂を傷つける恐ろしいものなのです。

本当はミアに頼んで手当してもらいたいのですが、ここには自分しかいません。

やるしかない。

「ウオート・スコール・ヴェ・ティフル・エツシユ。」

水流と浄化の魔旋律を組み合わせた呪文です。水流で鉄の破片を除き、浄化で傷口を清潔にします。マイは傷口を痛めないよう、慎重に魔力をコントロールしました。

「傷が深いから……トウレン・ファイ・アル・アツシユ！」

マイは強めの治癒魔法を使いました。魔力をだいたい消費する魔旋律なので、短時間に何回も使えません。

傷口が塞がると、マイはリユドミラの額に手を当てます。

「熱がある……。」

鉄に触れたことからくる熱は、本来いくつもの薬草を練って作った薬を使わなくてはなりません。薬草はどこにもなく、作り方も分かりません。

「熱を下げるだけでも……アデル・シエール！」

そこで、自分で作った頭痛を治す魔法をかけました。解熱の魔法でもあります。

熱が引いてくるのを感じたりユドミラは、足首を確認して、マイの手を握りました。

「鉄に触れて助かるなんて、思いもしなかったわ。本当にありがとう。」

その後、リユドミラはこうなった経緯を説明してくれました。

「私は密猟者に捕まって、手は紐で、足は鉄の輪で縛りつけられたの。鉄に触れてしまったから意識を失い、気がつけばここにいたわ。近くにあったチェストの角を使って紐を切って、深い傷を作って腐食した鉄もようやく壊したの。でもその瞬間にこれが倒れてきて、鉄の破片を残したまま下敷きになってしまった。」

リウドミラは、マイの手をとりました。

「本当に命の恩人よ。ありがとう。」

立ち上がったリウドミラは、「早くここから出ましよう。」と言って、マイの手を引きます。小走りをするリウドミラは出口を知っているようです。

向こうにいつそう眩しい光が見えました。

「よし、出口だ！」

しかし――。

「なぜここから出られた、いや、なぜ死んでいないのだ、リウドミラ。」

出口には悪そうな目つきの妖精が立っています。

「あなたは……ブルベガーのガイ・カーリン、メイヴさん。」

メイヴは、黒髪ロングのストレートに、羽飾りがたくさん着いた黒いドレスを着ています。

「人間のお嬢ちゃん、あたしの名前を知っているんだねえ。」

リウドミラはアールヴと呼ばれる光の妖精ですが、メイヴはブルベガーと呼ばれる闇の妖精なのです。リウドミラはアールヴの世話役の1人、メイヴはブルベガーの女王です。『ガイ・カーリン』は妖精の言葉で『女王』という意味です。

「あなたが私をさらったのですか。」

「あたしはしてないよ。ただ、あんたを連れていきたいって言う人間がいたから、私は妖精の森に入らせてやっただけさ。アールヴの重要人がいなくなれば、あたしにとつて、とてもいいことだからねえ。」

マイは、アールヴはブルベガーを嫌っていることを思い出しました。しかし『あの本』の話では、妖精同士仲良くするのを約束していたはずです。

しかも『殺す』なんて、あの時よりも関係が悪くなっている……。

「お嬢ちゃんに助けてもらったんだろ。その子から魔力を感じるからねえ。そうなら、お嬢ちゃんも放っておくわけにはいかないか。」

マイを見るメイヴの目つきが変わりました。次の瞬間、メイヴの手には、金属の鎖がありました。

「こんなもんしかないけど、まあ、鉄だからいいよな。」

マイはサツと離れて距離をとりました。

「我らを守れ、マギニーム・ガドール！」

見えない壁で自分とリュドミラを囲みました。

「なるほどねえ。」

メイヴは鎖に紫色のもやをまとわせると、鎖をマイに向かって放ちました。鎖は見えない壁を突き破ります。

「壁が…このままじゃー！」

今度は、鎖がリュドミラに向かって伸びています。

「クリス・グルーアッシュー！」

瞬間移動の呪文で、マイはリュドミラの前に立ち塞がります。

鎖は案の定見えない壁を突き破り、マイの顔に向かって飛んできます。マイは目をつぶりしました。

鎖はマイの額に当たりました。そこに手を触れます。

ねちよ……

「！」

目を開けると、メイヴが腰を抜かし、怯えた様子でこちらを見ていました。

「こ、こつちを見るな……。」

第3の目が開眼していたのです。

マイは空色の渦目でメイヴを見たまま、歩みを進めます。

「私は、あなたを殺すようなことはしません。妖精同士、仲良くするって約束したんじゃないですか？」

その言葉に、リュドミラが何かに気づきました。

「マイナーレさんって、もしかしてトリシアと——」

「トリシアは、私の妹です。」

トリシアの名を聞いたメイヴの顔が強ばります。

「トリシアとステラを呼びますよ。命の恩人のトリシアを裏切るつもりですか。」

すると、メイヴはなぜか高笑いをしました。

「お嬢ちゃん、これは実技テストなんだよねえ。あたしはリユドミラを殺したりはしない。」

「でも、リユドミラさんの足に鉄の輪が！」

「あれは人間がしたことだ。あたしはそんなこと指示していない。」

マイは啞然としています。

リユドミラがマイの隣に立ちました。

「我々妖精は今も仲良くやっていますよ。私はアンリから頼まれて、仲が悪くなっているという設定で、演技をしろと言われました。」

「いくつか魔法を使わせて、トラブルを解決したら、ここから出してもいいってな。まさか、そこに悪い人間が絡んでくるとはな。」

メイヴはマイの頭をくしゃくしゃと撫でます。

「まあ、リユドミラを救ってくれてありがとうな。悪い人間は、仲が悪くなったとか、そういうのを聞きつけるのが早いんだ。」

「マイさん、これはお礼に。」

リユドミラがポケットから何かを取り出して、マイの手に握らせました。

「ブレスレット……?」

手を開くと、赤・茶・緑・青・黄・紫・桃の7色の玉が順番に並ぶブレスレットがありました。

「これは、魔法の分類を色で表したものですな。」

マイたちが使う魔法は、火・地・風・水・光・闇・時の7種類があります。

1つだけ1回り大きな、透明の玉がありました。

「その透明のやつは、使った魔法に反応して光るんだ。」
と、メイヴ。

「それじゃあ、フォーギル・シエン！」

マイはブレスレットをつけると、鎖に向かって解呪の魔法をかけました。透明の玉が黄色に光って、紫色のもやを吹き飛ばします。

「あのね、マイナーレさん。そのブレスレットは元々、あなたのお父さんのハクトが使っていたものなの。魔力を増幅する効果があるわ。」
「あと、あんたがつけてる雪の結晶のペンダントも、ハクトのものさ。ハクトはあたしら妖精にとつて、子どもみたいな人だったからな。」

マイの胸に込み上げるものがありました。

「マイナーレさんがその姿にならなければ、ハクトのお子さんと、奇跡の子だとは分かりませんでした。お父さんの形見として、大切にしてくださいね。」

「はい、言われなくても。」

マイはサファイアを胸に押し当てます。

「トリシアよろしくお伝えください。」

「分かりました。あと、次に彼女と会う時は『ミア』って呼んであげてください。何か知り合いに、そう呼んでくれと強制しているので。」

メイヴが初めて笑顔になりました。

「おや、アンリのところに帰る時が来たみたいだな。」

周りの景色が歪み始めました。

「そうみたいです。では、また会う日まで。」

マイはにっこり微笑むと、光の粒となって消えました。

「……んー、ここは？」

まだ焦点が結びませんが、ここは診療所のようなです。

「マイーやっと起きたんだね！」

ミアが涙ぐんだ顔で覗き込んでいます。

「あれ、私は実技テストを受けて……。あつ、ブレスレットは？」

「手首に、ちゃんとあるよ。もう2日間も寝てたんだから。」

「そんなに！」

マイはカバツと起き上がりました。空が茜色に染まっています。

「アンリ先生から聞いてびっくりしたよ。リュドミラとメイヴのところに行ったんだってね。帰ってきた途端に、変化したまま気を失ったらしいの。負担をかけすぎたって謝ってきたけど。」

「帰ってきたってことは、合格したみたいだけどな。」

レンが白衣姿でマイのそばに来ました。

「それで、妖精の森で何をしたんだ？」

マイは2人にあのことを話しました。

「魔法だけで、鉄に触れたりユドミラを助けたの！」

ミアはやれやれと首を振ります。

「ホントは、薬草とか使って治さなきゃいけないのは分かってるよ。でも、しょうがないじゃん？」

「いやいや、それほどの怪我を治すには、相当な魔力が必要だし、コントロールも難しい。俺はもちろん、医者ミアでさえ魔力切れになるさ。」

ミアは音を立てて息を吸うと、「マイの魔力が未恐ろしい。」と言って目をそらしました。

「しかも、マイの手首のブレスレット。あれで魔力を増幅できるから……。」

遠慮気味に、レンがブレスレットを指さします。

「そっか……って、ええっ!!」

後ずさりするミアを見て、マイは自分に秘めていた力の大きさを、ようやく自覚したのでした。

？ 医師試験

「光よ、痛みを消し去れ。ライト・アン・ルート。」

今は午後の診察の時間。足をひねったネコに、ミアが治癒魔法をかけていたところですよ。

『先生、ありがとう！』

「いいえ。これでだいぶ歩けるようにはなったと思うけど、まだ高いところからは飛び降りないでね。」

『分かった。』

「明日また来てね。怪我の具合を見たいから。」

足に包帯を巻いたネコは、伸びをしてのどを鳴らします。

『明日、お礼にリングゴ持つてくるよ。』

「ほんとに！やったあ！」

まだ少し足を引きずっていますが、自力で歩いて診療所を去っていききました。

「流石ミアだね。さつきは立つことすらできなかつたのに、あそこまで治しちゃうなんて。」

ミアはミアの隣に来て言いました。

「ああいう風に、気持ちよく帰ってもらうのが嬉しいんだ。」

ミアは微笑みます。

「ところで、マイは星見の塔卒業して、この後どうするの。何か資格でも取る？」

「うーん、一応、英検4級は持つてるけど。」

「いや、妖魔界で。」

「そうだなあ……。」

ミアはうつむきました。

「ソリス……。」

「ん？何、ミア。」

「ソリスみたいな先生、いないかなあ。あんなにガサツなのは嫌だけど。」

窓を開けたミアは、医術の師匠・ソリスがいる、カール・ナライの

方角を見て目を細めます。

「私、そろそろ獣医に専念してもいいのかなあって。」

マイもミアの隣に来て、窓の棧に頬杖をつきました。

「ふうん。確かに患者さんはほとんど人以外だよね。」

「まあ、魔法医は私だけだし、別に、獣医に専念しなくてもいいのかな。」

マイは頬杖をついたままつぶやきます。

「医者……か。」

「マイが医者になりたい!?!」

レンとミアは目を見開きました。

「まあ、星見の塔の落ちこぼれでもなれたんだし——ったあつ!」

ミアに足を踏まれたレンは、テールに足をぶつけました。

「だって、本当だろ。アンリ先生に教えてもらったことの内、どれくらい覚えてるんだか。100年前のアムリオンを治めていた人は?」

「お、覚えてるよ! えつと………分からない。」

「ほら、やつぱり。」

「と、とにかく、こっちはレンを薬剤師として雇ってやってるんだから、そういう言葉は慎みなさいよね。」

「ホントのこと言ってるだけなんだよなあ。」

と、そこに。

「静かにしないと、どうなるか分かってるよね? ラシール・ゴー……。」

マイの手の平に、青白い炎が灯ります。

「ひいっ!」

レンとミアは姿勢を正して、お互い目を背けました。マイが1つ火球を放てば、診療所は丸焦げになるでしょう。

ミアは咳払いをしました。

「次の試験は……3ヶ月後かあ。3ヶ月じゃ結構厳しいなあ。」

「それでもやってみるよ。ミアに教えてもらえるし。」

マイはミアに向き直ると、頭を下げて、「ミア先生、よろしくお願いします。」と言いました。

「よ、よろしく。」

マイから『先生』と呼ばれて、動揺を隠せないミアでした。

次の日から、マイはミアから本を借りたり、本屋で買ったりして勉強を始めました。ミアの助手として、医師免許がなくてもできる仕事は率先してこなしました。

「マイ、まだ起きてんのか。」

レンがドアから覗いています。

「キリのいいところで終わらせるから。」

マイは振り返らずに答えます。

「明日もあるんだから、早く寝ろよ。」

「はいはい、分かってる。」

「マイ、最近疲れが溜まってるんじゃない？大丈夫？」

「うん、平気、平気。大丈夫だよ。」

マイが勉強を始めて1ヶ月が経ちました。マイは朝食の準備をしているはずなのですが、姿がありません。

「あれ、マイは？」

「さあ？知らない。」

そこに、トイレから戻ったマイが来ました。2人はすぐに異変を感じました。マイのまぶたがとろんとしています。

「レン、ミア。これからご飯作るから……。」

そう言うと、膝について倒れてしまったのです。

「マイっ！」

レンはマイの肩を叩いて意識があるのを確認すると、ミアはマイの額に手を当てました。

「うわっ、ひどい熱！早くベッドに！」

「分かった！」

ミアはマイの自室のドアを開け、マイを抱っこしたレンを通します。

レンがマイを横たえると、マイはうつすらと目を開けました。

「レン……ミア……ごめんね。」

「もう、無理するから。」

ミアはタオルをマイの額に乗せました。

「マイが好きなカモミールを採ってくるから。ちゃんと休めよ。」

「うん。レン、ありがとう。」

マイは微笑みましたが、苦笑いのような顔になっているんだろうな、と思っていました。

マイはこの後風邪のような症状が出たため、このまま隔離となりました。レンとミアは、自分が保菌している可能性を考え、マスクをして診察を続けました。

風邪なら、長くても2日から3日すれば熱が下がりますが、マイは5日経つても下がりません。

「マイ、全然熱下がらないなあ。花粉症とかのアレルギーは、確かにかつたよね?」

38度台から下がらない体温計を見て、ミアは質問します。

「うん、ないよ。あのさ、昨日くらいからあのカモミールの匂いがしなくなっただけだよ。」

マイは布団から手を出して、テーブルの上の花瓶を指さしました。

「えっ、匂いするよ。じゃあこれは?」

ミアはさつきまで食べていたチョコレートを持ってきます。

「……しない。チョコの匂いしない。」

「うーん、嗅覚もやられてるなあ。」

ミアはカルテに書き込むと、タオルを濡らしてマイの額に乗せました。

「ミア、これ普通の風邪じゃないね。」

「私もそう思う。だとしたら何だろう。」

マイも考えますが、頭痛がひどくなってきたので、また目を閉じました。

しかし次の日、マイの熱が平熱に下がったのです。

「36.5度。舌で測ることを考えても平熱だね。よかったあ！」
確かに頭痛も収まり、だるさもあります。

「まだ完治じゃないけど。」

マイはミアから借りている本を取って、勉強を再開しました。
この部屋から出なければいいのです。数日ぶりの勉強です。

「熱が下がったからって、無理したらまたぶり返すからね。」

「もちろんだよ。完全には治ってないから分かってる。」

マイが医師になりたいと思ったのは、ミアと再会してからではなく、それよりもっと前からでした。

小学5年生くらいから見始めた、医療ドラマがきっかけです。同じ頃に『トリシア』シリーズの本にも出会って、マイはお医者さんというものに憧れるようになりました。そのドラマとトリシアの共通点は、『その人がどんな身分であれ、目の前の患者は絶対に見放さない』こと。自分の医療行為と釣り合う額を払えない患者でも、医師としての義務を果たす。こういう、当たり前前のことを当たり前前にできる人がかっこいいな、と思っっているのです。

「ロスクランナ・コラルル・アールド・ヴェ・ベントイン・アガス・フェリック！」

マイは自分に半透明になる魔法をかけました。熱が下がって魔力が戻り、魔法が使えるようになりました。

姿見に自身を映すと、マイはうなずきました。

「やっぱり。私、肺炎起こしてる。」

普通の風邪であれば、肺にこのようなもやはできません。

「呼吸数が増えているのも、そういうことか。」

その夜、マイの熱は40度台まで上がってしまいました。

ミアは体温計を見てため息をつきました。

「マイ、肺の状態を見たいんだけど——」

「やっぱり肺炎だった。肺にもやががあった。」

マイは食い気味に伝えます。

「やっぱりかあ。」

ミアは書き込んだカルテをテーブルに置きました。

「今のところ、症状を抑える薬しか出せないんだよね。原因が細菌なのかウイルスなのか、はつきりしない限りは。とりあえず、これ飲んで。」

レンが調合した薬をマイの口に流し込みます。

「明日から診療所は、マイがよくなるまで休みにしよう。」

理由は言わずとも、マイは分かっていました。

「ごめんね。でも、他の患者さんにうつしちやいけないから。」

「うん。症状が出ないだけで、私もかかっているかもしれないからね。」

マイは薬を飲むために外したマスクをつけると、布団を被って目を閉じました。

数時間後、息苦しさに目を覚ましました。咳をしすぎて腹筋が痛みます。

息を吸うだけで、激しい痛みに襲われました。ガラスの破片を吸い込んだかのようです。肺を膨らまして呼吸するのがしんどいのです。

肺炎がひどくなると、陸でも溺れるってこういうことか、と身に染みました。

肺だけではありません。他の臓器も痛みます。

「これは……かなり……ヤバイ……。」

マイは大量の汗をかいていて、唇は紫色をしていました。

全身が痛むので、体を起こすことすらできません。2人を呼ぼうにも、まともに声を出せないのです。

「お願い……早く来て……。」

遠のく意識で必死に訴えますが、別室にいる2人には届きません。

マイの手が宙を掴み、バタツと手が降ろされました。

10分後、マスクをしたレンがマイの自室に入ってきました。

「うん、寝てるな……ん？」

ベッドからだらりと垂れた腕、血色のない顔。

「マイ、大丈夫か？マイ！」

肩を叩きますが、マイの反応はありません。

レンは耳をマイの口に近づけます。

「……呼吸してない！」

3本指でマイの首に当て、脈を確認します。

「脈はある。」

レンは階段の近くまで走り、「ミア、ミア！マイが！」と言ってミアを呼びました。

「分かった、今行くー！」

ミアの返事を聞いたレンは、すぐにマイの元に戻り、白衣のポケットから人工呼吸用のマウスピースを取り出して、マイに被せます。こうすることで、患者からの感染の危険をほぼ回避できます。

マイのあごを上げ、人工呼吸を開始しました。

そこにミアも駆けつけました。その様子を見て、酸素マスクと酸素濃度計を用意します。

「レン、ありがとう。マスクに変えるから。レンは心電図計と点滴お願い。」

「了解。」

レンと素早く交代したミアは、酸素マスクをマイにつけ、出力する圧力を調節しながら、今までのマイの症状を整理していました。

「マイが発症したのは、4月17日。発熱した直後に咳・痰・咽頭痛。熱は38度台が5日続いた。嗅覚・味覚障害あり。今日の朝に1度、熱が36.5度まで下がったけど、さつきは40度まで上がった。そして意識を失い、呼吸が停止した。肺炎を起こしている。」

ミアが考えている間に、酸素濃度計の測定結果が出ました。

「58パーセント。レンの人工呼吸で少しはマシだと思うけど。」

レンが心電図計と点滴を持ってきました。

「点滴に抗菌薬入れるから持ってきて。」

「そうだと思って持ってきた。」

レンは注射器をミアに渡し、点滴に注入します。

「まだ心臓が止まっていないことに救われたよ。」

マイの腕に点滴の針を刺しました。酸素濃度はまだ60パーセント台ですが、心電図の波形は規則正しいものでした。

「抗菌薬入れた時点で分かったと思うけど、敗血症を起こしてる。全身に浄化の魔法をかけるからレンもお願い。」

「分かった。」

敗血症とは、血管やリンパ管に病原体が入って全身を巡り、重い臓器障害が出て重篤な状態のこと。マイの場合、肺炎を起こした病原体が、血管の中に入ってしまったのでしよう。

「ティフル・エツシュ！」

2人は浄化の呪文を唱えると、マイは白い光に包まれました。

「敗血症からARDSも起こしてる。」

「急性呼吸促進症候群（きゅうせいこきゅうそくはくしょうこうぐん）だね。」

「そう。肺胞が膨れ上がってる。レン、もう1回肺に浄化の魔法を。」
目配せをした2人は、息びったりに魔旋律を唱えました。

「どうしてもっと早く治療しなかつたんだよ。」

酸素濃度計とにらめっこするレンが言います。

「肺炎は、マイくらいの年齢なら自然治癒が1番なの。それに、さつき病原体がウイルスじゃなくて細菌だったのが分かったから。ウイルスなら浄化の魔旋律は効かないからね。」

浄化の魔法は、特定の細菌の細胞壁を壊す効果がありますが、ウイルスには細胞壁がないので効かないのです。

「そうだね。こんな短期間で急激に悪化するなんて、まだ理由があるんじゃないのか。」

『サイトカインストーム』だと思う。免疫システムが暴走すること。たぶん、肺で急激に増えた細菌に免疫が対応しようとしたら、制御できなくて健康な細胞までも壊してる。」

ミアは片手をマイの胸にかざし、「ルイト・アン・ルート。」と、治癒魔法をかけました。

「ということは、免疫を抑える薬だね。持ってくる。」

レンがまた取りに行き、薬が入った注射器をミアに渡し、点滴に追加します。

「正常な働きに戻って。ファイ・ビータ・アツシュ。」

弱った体力を回復させる魔旋律です。免疫システムの正常化にも効くものです。

しばらくして、マイが目を覚めました。

「マイ……よかった。おかえり。」

涙ぐんでいるミアの顔を見て、自分にたくさんの機械が繋がれていることに気づきました。

「ただいま。」

酸素マスクで声が曇ります。

「レン、ミア、ありがとう。そしてごめんなさい。医者になろう者が迷惑をかけてしまつて。」

「ホントだよ。寿命が縮む。」

レンは冗談を言いますが、ミアの返答は違いました。

「いいの。私もおんなじことしたから。」

マイの手を握るミアは、今まで見たことがないくらいの柔らかい笑顔でした。

「歴史を変える前の話。診療所をずっと休み取らずにやり続けた結果、倒れちゃって色んな人に迷惑や心配をかけた。マイもこれ分かつただろうし、ね？」

「うん、反省してる。」

マイはこの後、気を失っていた時のことを聞かされ、息びったりなミアとレンや、ミアの迅速かつ的確な診断に感動しました。

2ヶ月後、診療所で白衣を着る人が1人増えました。

「私はマイ先生に、うちの愛犬はミア先生にお世話になつているの。」
「レン先生もいいわよねえ。あの3人、三つ子のきょうだいなんだつてね。」

「それに、3人とも、音楽も嗜んでいるらしいわ。どこかの大会で優勝、とか。」

と、立ち話をしているおばさまたちの前を通りすぎた、三つ子でした。

? 血涙

マイが医師になって間もないある朝、マイは冷蔵庫の中を見て言いました。

「ねえ、今日買い出しに行かないと、今日の夜ご飯が作れないなあ。」
「えっ、もう?。」

と、レン。

ミアも冷蔵庫の中を見ます。

「じゃあ、昼休みの時間に行こっか。」

ミアの提案に、マイとレンはOKサインをしてから、ニコリと微笑みました。

そこに、ノックせずにいきなり診療所のドアが開いて、ダツシユが現れました。

「おーい、相棒!騎士団から招集されたぞ!西街区で強盗がいるんだってよ!。」

レンは、鎧を着て風の双剣を腰にさすと、急いで階段を降ります。

「あのな、ノックくらいしろよ。」

「そうだな。悪い悪い。」

頭をかいたダツシユは、ドラゴン姿に変化しました。

オニキス・ドラゴン(黒竜)のダシルは、白天馬騎士団の新人。人間姿に変化でき、レンは馬ではなく、ダツシユに乗って戦います。

「ごめん、診療所2人で頑張っつて。行っつてくる。」

後を追って診療所の外に出たマイとミアに、レンはダツシユの背中から詫びの言葉を言います。

「こっちは平気。頑張っつてね〜!。」

ミアが手を振ると、竜騎士とその相棒は旋風を起こして飛び去りました。

「今日も2人だね。まあ、しょうがないけど。」

小さくなっつていく影に、マイはほつりとつぶやきました。

そして、昼休みの20分くらい前に、レンが帰っつてきました。

待合室にいた患者が、一斉にレンの方を向きます。全身泥だらけ

で、ところどころにすり傷がある状態だったからです。

「あー、失礼しましたー。」

レンは裏口から入ることにしました。

「おかえり、レン。……何か地味に痛そうな怪我してるけど、昼休み入ってからね。自分で応急処置できるでしょ？」

ちようど1人の診察を終えたマイが、レンに呼びかけました。

「ちよつと、冷たくない？」

「急患じゃない限り、順番を守ってください。」

「……はあい。」

レンはとぼとぼ階段を登って、自室で着替え、調剤室で応急処置を済ませます。白衣を着て、残っていた1人と3匹の患者さんの薬を処方しました。

午前の診察が終わり、マイはレンの手当てもしてあげました。

「傷口洗って、消毒はしたんだよね？」

右肘と右手に軽く巻かれた包帯を取り、傷の状態を確認します。

「これは……その強盗ってやつに吹っ飛ばされた？レンガ畳に右腕から落つこちた感じだけど。」

「……当たり。」

地面が土だった時、レンガだった時、室内だった時で傷の状態が違うのです。

「優しき光が傷を癒す、ルイト・アン・ルート。」

マイはレンの手の平と肘に手をかざし、治癒魔法をかけました。

「でも、落ちた衝撃を、意図的に転がって分散させたのは正解。ヘタしたら腕折れるよ。」

「分かってる。けど、何で傷見ただけで合ってるんだよ。」

「勘。」

レンは額に手を当てて、ため息をつきます。が、ただの勘ではなく、師匠のミアが教えこんだ勘であることは、胸の内に留めておきました。

ミアは先に昼食を作っていました。

「今日も、色んな動物たちから食材もらったなあ。」

マイが医師になってからは、主に動物の診察をするようになったミア。動物たちは貨幣を持っていないので、診察代の代わりに食べ物を持ってきてくれます。

「前は、動物しかここに来ないから、お金がもらえなくて大赤字って言うってたけど、私は十分に食材でも助かるけどね。」

トマトを切るミアの元に、マイが歩いてきました。

「わっ、マイー！何でそんなこと知ってるの！………あ。」

『本』に書いてあったから、ね。」

ニンマリしたマイは、鍋に水を入れ、お湯を沸かします。

しばらくして、円形のテーブルに3人分のパスタとサラダが並びました。

マイとミアが手を合わせようとすると、レンはトレーに何かを乗せて、こちらに来ました。

「紅茶入れたよ。今日はアールグレイ。」

「ありがとー！」

カップから漂う深い香りが、食欲をそそります。

「じゃあ、いただきますー！」

3人同時に手を合わせて、3人ともあっさりめのクリームパスタに手をつけました。

食べ終わって食器を片づけると、すぐに買い物の準備に取りかかりました。

「ちよつと急ぎめで行こっか。」

午後の診察は2時半から。あと1時間半しかありません。

「もう行けるよ。」

レンは何枚かの銀貨と買い物袋を持っています。

「マイが皿洗いしてる間に2人で用意したからね。」

ミアのドヤ顔にマイは笑いそうになりながら、「どうも、ありがとうございます。」と答えました。

三つ子はいつも買い物に行く、東街区に足を運びました。通りに所狭しと並ぶ屋台から、次々に食材を買っていききました。

マイは、丁字路の突き当たりにある時計を見ました。

「あれ、以外と早く終わったね。って、レン?」

レンが足を止め、あるお店の方をじっと見ています。

「武器屋……何で?」

「何かさ、ヴィントール王家のものだったこの双剣を、仕事以外で持ち歩くのはちよつとな、って思ったんだよ。普段使いできるやつが欲しくてさ。」

「なるほど。でもその双剣はレンを選んだんでしょ。常に持ってた方がいいんじゃない?」

「……そっか。じゃあ見るだけ。」

何が何でも見たいらしく、レンは吸い寄せられるように店の中へと入りました。

「私たちは興味ないから、先帰ってるね!」

マイは2つの買い物袋を持ち上げました。

「荷物持ちが行っちゃった。絶対逃げたよ。」

ミアも1つ買い物袋を持って、レンを睨みました。

この時のマイは思ってもいませんでした。

10分もしないうちに、大変なことに巻き込まれることを。

レンがお店の中に入りました。店内は思っていたよりも暗くしてあります。

「いらっしやいませ。」

店の奥に、ベールを被った女の人がありました。顔は見えませんが、その声は若い人のように聞こえます。

「あの一、短剣はありますか。できればおすすすめを聞きたいんですけど。」

「短剣なら、そちらにございます。おすすすめは、その緑のラインがある鞘の短剣ですね。」

女の人はショーケースの鍵を開け、その短剣を取り出して、レンに渡しました。

「おお、軽くて使いやすそう。」

そう言いながら、レンはチラッと女の人を見ました。

自分よりは7インチ半(約20センチ)くらい低いなあ……。マイ

やミアよりも明るい栗色の、腰まで伸びたまつすぐな髪。

この距離・角度からでも、ベールの内側は分かりません。

「お客様は、魔法使いでいらっしやいますか？」

レンは驚きます。

「は、はい。そうですが。」

「魔力を感じたもので。でしたら、あの商品はいかがですか？」

それを取りに行った女の人を見て、レンにある予感が頭をよぎりま
した。

（あの人から妖力を感じた……。妖怪……。何でアムリオンなんかにい
るんだ？）

女の人が戻ってきました。

「こちらでございます。『魔力強化のペンダント』です。」

「魔力強化……。」

短剣を起き、手渡されたペンダントを、レンは怪しげに見つめます。

正五角形の形をしていて、白いフレームに、外側が緑、内側が黄色
く、正五角形に塗装されたものがはめこまれています。黒い紐で首か
ら下げられるようになっていて、紐の金具で着脱できるようです。

怪しすぎるから買う気はないけど、つけてみるならいいよね。

「試しにつけてもいいですか。」

「どうぞ。ではつけますね。」

レンはつけやすいように、少し屈みました。

「恐れいります。」

パチッ

金具が留まる音がしました。

女の人はなぜか、そそくさとカウンターの方に行きました。

レンは、ベールがはたためて見えた口元にゾツとしました。微かな
ほほえみをたたえていたのです。

ハツとしてペンダントを見ました。ペンダントがみるみると変色
しています。フレームはガラスのように黒く、緑の塗装は紫色に、黄
色の塗装は赤紫色に変わりました。

まずい、そう思つて金具に触った瞬間、頭を貫くような痛みに襲わ

れました。

「う……うう……。」

頭を抱え、顔を歪ませると、レンはその場に倒れこんでしまいました。

その時、ちょうどダツシユがお店に入ってきた。倒れているレンを見たダツシユはそこに駆け寄ります。

「おいっ！相棒！どうしたん……っ！」

レンに触れた瞬間、指先に激痛が走りました。

「何だ、この真つ黒はやつは。……チツ、これに呪いがかかっているな。」

ダツシユはこちらを見る女の人に気づきます。

「おい、店員！どうなってんだよ！」

女の人はふふつと笑います。

「お前は相棒に何をした！」

「私の手に、まんまと引っかかりましたね。残念ですが、元には戻らないでしょう。そろそろ呪いが効いてくるころですよ。」

「何だつて……！」

ダツシユの瞳が怒りの炎の如く、赤く光ります。

すると、レンは目を覚まして起き上がりました。

「相棒、気づいたか！」

ダツシユはサツと黄色の瞳に戻して、レンの肩に触れようとしています。

「ああ？何だよ。そこをどけ！」

「レン？」

「どけつて言うてんだよ！さもないと——」

レンはスつと立ち上がって、ダツシユに右手を向けると、ダツシユは見えない力で吹き飛ばされ、陳列棚に激突しました。

「お前をぶちのめす。」

ダツシユはレンと目が合い、震え上がりました。その目は鶯色の渦目をしていましたからです。いつの間にか、髪型は金髪になっていました。

「ど、どうしちゃったんだよ、相棒……。」

ダツシユは痛みをこらえて起き上がります。

「ダーゲットは、忌まわしきマイナーレとパトリシアだ。」

そう言つて、レンは店のドアを開けて去つていきました。

ダツシユはレンを追つてお店を出ますが、もういません。

「くそつ、マイとヤブ医者が危ねえぞ。早く伝えないと!」

ドラゴン姿に変化しましたが、翼が折れていて飛べません。今になつて、左前足（左腕）が痛み出しました。

「走つていくしかねえ!」

人間姿に変化すると、左腕を押さえて、診療所の方へ走り出します。ダツシユが行つた方向に、ちょうどマイとミアがいました。まだレンは来ていないようです。

「マイ! ヤブ医者!」

「ダツシユ! っつて、ヤブは余計よ。」

ミアはダツシユの頬をつねります。

「腕、腫れ上がつてるけど、大丈夫?」

マイはダツシユの左腕を指さしました。

「相棒が呪いみたいなもんにかかつて、暴走してんだよ! それでこのザマだ。」

「レンが!?!」

ダツシユは抑えていた手を離し、マイとミアに見せました。

「うわ……よく走つてこられたね。骨折してるかも。こつちに来て。」

マイはダツシユを路地裏に連れていき、治癒魔法を使います。

「トウレン・ファイ・アル・アツシユ!」

7色ブレスレットの玉が黄色く光り、ダツシユの腕が緑色の光で包まれます。強力な治癒魔法とブレスレットで強化され、ダツシユの骨折は一瞬で治りました。

「ありがとよ。レンはお前とヤブ医者を狙つてたな。気をつけろ。」

「私たちを? ……分かった。」

と、そこに。

「ここにいたのか。」

妖怪姿に変化したレンが立っていました。

「話は聞いた。」

「どうするつもりなの。」

マイとミアはいつもと声色を変えて尋ねます。

「ミア……いや、まずはお前だ、マイー・ガデル・ラームー！」

次の瞬間、マイに向かつて青白い光球が飛んでいました。

「クリス・グルー・アツシユ！」

マイはすぐさま応じ、瞬間移動で光球を避けます。

「チッ。」

レンは舌打ちすると、その姿が消えました。

「レン、待って！」

「……どこ行つた？」

路地裏から飛び出したダツシユは、辺りを見渡します。

「ダツシユ、いた？」

「この通りにはいないみたいだな。なあ、マイ。」

ダツシユは怯えたような顔をして、マイを見ました。

「何で相棒の髪が金髪になってて、あんな目をしてたんだ？」

その質問に、なぜかミアが答えます。

「それは、マイとダツシユが初めて会った時に言ったはず。」

初対面は、『三本足のアライグマ』亭。そこで話はしましたが、妖怪姿には変化していません。そもそも、ポムに見せた時以来、変化していなかったのです。

「私たちが、魔法使いと妖怪のハーフだってことは知ってるよね。額にある第3の目のことも。」

「そんなこと言ってたな。」

マイの確認にうなづくダツシユ。

「その第3の目の封印を解くと、金髪になって、渦目という特殊な目になるの。」

「アムリオンは平和だから、変化して妖力を使う時なんてなかったんだけど。あと、見た目怖いでしょ？」

ミアの問いかけに、ダツシユは再び怯えた顔をしました。

「怖いってもんじゃないぜ。レンに気づいたら吹っ飛ばされたから、

その妖力ってやつを使ったのかもな。魔旋律は唱えてなかったぞ。」
その時。

「何だ、あの雲は!」

「キヤー!・何あれ!」

急に空が暗くなりました。

通りの真ん中に集まっている人が、その雲を指さしています。

マイは目を見張りました。

空全体を覆う真っ黒な雲が、渦を巻いていたからです。

「もしかして、あの中心にレンが?」

「そうかもしれねえ。相棒を頼む!」

「絶対助けるから!荷物お願い!」

ミアは強くうなずくと、3つの買い物袋をダツシユに任せ、マイの手を引きました。

「早く、レンを助けに行くよ!」

渦の中心に向かって走るミアの目がうるんでいます。

「ああ、もう、あいつつてば!心配ばかりさせるんだから!」

「前にもあったよね?似たようなこと。ベルが『性格を真逆にする首輪』をレンにつけちゃって、レンが王都を巻きこんだこと。」

「だから嫌なの!・レンの身に何か起こったら、気が済まないから!」

うるんでいるその瞳は、キツと前を見すえています。

「ちよつと待って、星見の塔!」

一度も休むことなく全力疾走だったマイとミアは、思わず急ブレーキ。渦を巻く雲の中心は三つ子の学び舎、星見の塔でした。

「レン、今すぐ降りてきなさい!」

生徒を全員避難させた、星見の塔の先生のアンリは、星見の塔の屋根に向かって叫んでいます。

「先生!」

マイとミアがアンリの元へと駆けつけました。

「僕が行こうにも、結界が張られていて入れない。僕の魔法では太刀打ちできない。」

「そんな!先生でさえ!」

アンリは、他の魔法使いからも一目置かれる存在。アンリとは何年ものつきあいのミアだからこそ、驚きは尋常ではありません。「どうやら、その結界は魔法で作ったものではないみたいだ。おそらく、妖力だ。」

そう言うと、アンリはマイとミアを射るような目で見ます。「君たちならあの中に入れるだろう。奇跡の子たち。」

こうなると、久しぶりに妖力を使わなければいけません。

「なるべく開眼してる時間は短くいこう。ミア。」

第3の目を開眼すると妖力を得る代償に、体力をかなり消耗するのです。

「分かった。あの中に入る時は？」

「結界までは風の魔法で飛んで行って、入る瞬間だけ開眼する。他の人が見てるから。」

「了解。」

マイとミアは同時に、風で物を吹き上げる呪文を唱えます。

「ルフト・ビハーカ！」

7色ブレスレットの玉は緑色に光り、風を切る音とともに、2人は屋根の近くまで飛びました。

2人は阿吽の呼吸で、ほぼ一緒に額の第3の目を開眼させました。入るときに凄まじい爆風を受けましたが、無事に結界の中に入りました。

2人は第3の目を封印して、屋根に降り立ちます。

マイがレンの姿をとらえた瞬間、レンは片手をまっすぐ上に挙げ稲妻を放ちました。すると、結界の中も外も、土砂降りの雨が降り始めます。

マイの髪からは早くも水が滴り落ちました。

「レン！あなたの望みは何？何のために黒い渦の雲を作って、結界を張って、私たちを呼び寄せたの？」

「俺の望みは、俺の人生をめちやくちやにしたお前を倒すことだ。マイ。」

渦目のつり上がった目でマイを睨みつけます。

「て言うか、気づいてないんだな。」

その言葉にハツとして隣を見ます。

「ミアをどうしたの!」

「ふっ、ここにいます。」

レンの隣に、ミアがフワツと浮き上がるように現れました。両手両足をイバラのようなもので縛られ、トゲが食いこみ、そこから血が流れています。

「俺に攻撃すれば、ミアを身代わりにするよ。さあ、俺とどうやって戦うのかなあ。」

マイは歯をくいしばります。ミアを人質に取られた瞬間を見ることができませんでした。やはり、渦目の超動体視力ではないと見えなようです。

「動かないなら俺から行くぞ。吹き飛べ、ブラス・エア・ファルヴー!」

あまりの竜巻の大きさに、マイは目を見開きました。

星見の塔で習った初級の魔法ですが、レンほどの魔力ではここまではならないはずだ。

ただでさえ足場が悪い屋根の上。それにこの雨。瞬間移動の魔法でも、超動体視力では見破られてしまうでしょう。

気づいた時には遅すぎました。

マイは竜巻にのまれ、上空高くまで吹き上げられました。洗濯機の中のような状況で呼吸もできず、意識を失います。

「「マイー!」」

結界の外の人たちが悲鳴をあげました。

「ふん。チョロいんだよ。」

レンが瞬時に竜巻を消すと、マイは頭を下にして真っ逆さまに落ち、激しく屋根に打ちつけられました。

この衝撃で意識を取り戻したマイは、あごに手を当てます。その手はすぐに赤く染まりました。

「レン、私を倒して何になるの。過ぎたものは戻ってこないのに……。」

ふらつきながら、マイは立ち上がりました。

「俺はこの手に入れた能力で、この世界を滅ぼし、新しい世界を創る。お前を殺せば、その能力はより強化されるんだ。」

レンは胸の黒ずんだ正五角形のペンダントを、爪で弾きました。「なるほどね。私だけでなく、この世界に住む全ての人を手にかけてよ。うと。それなら仕方がない。」

マイは額に貼つてあるシートをつまみます。

「姿を見られる覚悟で。」

そう言つて、マイは再び第3の目を開眼させました。茶髪が根元からスつと金髪に変わり、右サイドに編み込みがされ、空色の渦目になりました。

「変化したところで、お前が攻撃できないのに変わりはないんだよ！」

不気味な笑みを浮かべると、レンは腕を上には伸ばします。

「まずはお前に消えてもらう！いでよ、邪悪な妖獣！」

すると、レンの前に黒い犬のような獣が現れました。

ガルルルル……

獣は牙をむき出しにしてうなっています。

「あいつを引きちぎろ！」

レンの指示と同時に、マイに襲いかかりました。

マイの渦目にも速い動きです。

次の瞬間、マイの左上腕が燃えるように熱くなりました。

「うううううっ!!」

妖獣はマイの腕をかじりとつたのです。激痛にマイは膝をつきました。意識がもうろうとして立つことができません。

「もう終わりか？避けるだけじゃ大したことねえな。」

レンが高笑いしたその時。

「ルーイ・フィース。」

マイは血の着いた右手で、禁術である、植物を枯らす魔法をかけました。ミアに絡みついたイバラが瞬く間に枯れ、ミアは脱出しました。

「なにっ！」

レンに隙が生まれます。

「あのペンダントさえ壊せば……！クリオン・
テイイイイイイイイイイイイイイイイイイル!!」

マイは右手に炎の矢を宿らせ、ありつたけの魔力と妖力を注ぎこんで、正五角形のペンダントに向かって放ちました。

パキーン！

炎の矢はど真ん中に命中しました。少しでもずれていれば、レンに致命傷を負わせることとなったでしょう。

ペンダントは粉々に砕け散りました。

「マ……イ……。」

レンの瞳に光が宿るものの、気を失って屋根を転がり落ちていきます。

「レンー！」

マイは力を振り絞ってレンを受け止めますが、妖力も魔力も使い果たし、支え続ける力は残っていません。

「もう……だめ……。」

マイはレンを抱いたまま、一緒になって転がり落ちます。

ミアは屋根を滑りながら第3の目を開眼し、転がる2人が投げ出されるのと同じタイミングで、屋根から飛び降ります。空中で2人を受け止め、三つ子は地上に戻ってきました。

「ありがとう、マイ。何もできなくてごめんね。」

ミアの桃色の渦目には涙がありました。

「レン……おかえり。」

？ 不穩

次の日。

診療所の2階のマイの自室から、うなっている声が聞こえました。「よく頑張ったね、マイ。峠は越えたよ。」

切れたあごは縫われ、上から白い絆創膏が貼られています。左上腕には痛々しく包帯が巻かれています。

「ここまでえぐられると、全治するには半年はかかるよ。でも、妖力のおかげで自然に治りかけてるし、感染症にもなっていない。」

骨まで見えるかなり深い傷でした。普通なら動物に噛まれると感染症のリスクがあるので、縫合ができません。しかし、マイに妖怪の血が流れていることで、どんなに深い傷でも自然治癒で治るのです。

「私のイバラの傷も、一晩で元通り。」

ミアはマイに自分の手首を見せました。

「絶対にマイとミアだけは傷つけたくなかったのに。」

レンは、マイの手を自身の両手で挟むようにして握りました。

「大丈夫。」

レンの手を払いのけるマイ。

「怪我なら心配しないで。ミアがいるから。」

「マイ……。俺がああ呪いを見破れていたら、2人を傷つけずに済んだのに。本当にごめんなさい。」

「レン、泣かないで。」

マイは右手でレンの涙を拭い、その手をレンの頬に添わせました。痛みを歪めながらも、マイはできる限りの笑顔を作ります。

あのペンダントをつけた直後から、診療所で目を覚ますまでの間、レンの記憶はぼっかりとなくなっています。

目を覚まして、マイの姿を見た時の慌てようといったら、大変なものでした。その後、ミアから話を聞いて、レンは大きなショックを受けたのです。

一週間後、マイの怪我は驚異的な早さで完治しました。おまけに、マイは妖力と魔力を練り合わせた、『妖魔力』という新しい力を作り上

げました。

その夜。

マイが妖魔力で作った防音室から、かすかに楽器の音が聞こえます。中にはマイとミアがいて、それぞれクラリネットとフルートを吹いています。

コンコン、ガチャ。

「お、デュエットで練習中？俺も混ぜてよ。」

ドアから覗くレンの手にはトランペット。

ミアはフルートから口を離します。

「あれ、もう1人は？」

「ここにいるよー！」

ドアを支えるレンの腕の下から、黒髪を2つに結んだ女の子が顔を出しました。

「快気祝いに、今日は思いっきり暴れちゃおうかな！あ、爆音すぎて私の耳が死ぬわ。」

口を開けて笑うその女の子の手には、ドラムスティックがあります。

「よし、4人揃ったね。」

レンと女の子のチューニングが終わるのを待って、マイが言いました。

「明日は、みんなの前での演奏。妖魔界で1番になった私たちは、それ相応の演奏をしないとイケないよ。」

マイの表情はいつになく厳しくなります。

他の3人も、厳しい表情でうなずき返します。

『妖魔クアルテット』の名に恥じぬ演奏……か。」

そうつぶやいてから、女の子は三つ子を見すえました。

「発表前の最後の合わせだから、細かいところまでしっかりこだわろう。『妖魔吹奏楽団』の始まりにふさわしい演奏、してやろうじゃないの！」

「オーオー！！！！」

女の子がスティックの握られた拳を上げると、三つ子はかけ声と

もに楽器を斜め上に上げました。

「ここか。」

診療所の屋根に、誰かが静かに降り立ちました。

ポニーテールにされた長い銀髪の髪を、風になびかせています。髪が月明かりで鈍く光っていました。

「奇跡の子、私を恐れろ。あんたらは私に使われる運命なのだ。」

その人は薄く笑うと、「まずはお前だ。」と言って印を結び、人差し指と中指を額に当てました。

「天兵来たりて、我を助け、符神を作らせよ。」

宙に浮かんだ、人の形をした光る和紙に向かって、その人は素早く指を動かしました。

和紙の中心に、小さく黒い星が浮かびます。

「万鬼伏蔵せよ。急急如律令。」

和紙に向かって呪文を唱えます。

「はあっ！」

気を送ると、和紙は意志を持ったように飛んでいき、診療所の壁をすり抜け、防音室の壁もすり抜けて、誰かに貼りつきました。

「この呪符の効果が切れる頃、お前に災いが訪れるだろう。フッフッフッフ……。」

その人は一瞬でいなくなりました。この言葉を残して。

「あの程度の呪いも見破れないとはな。」